

日本緑化工学会 コミュニティレター

Community Letter of the Japanese Society of Revegetation Technology

第3号 2025年8月31日 発行



目次

「第56回日本緑化工学会大会」案内（第3報）……………3

研究ノート：東日本大震災から私は何を学んだか？ 岡 浩平……………16

：緑化の居酒屋談話その2 侵食防止剤を知っているか？の巻 田中 淳……………19

緑地探訪：新名神高速道路 甲南トンネル西側坑口 小宅由似……………23

：種崎の海岸マツ林 楠瀬雄三……………24

新会員の自慢：路傍の草を緑化工へ 熊田勇斗……………25

バブル世代のキャリアチェンジ夢 平林 聡……………27

書 評：屋根の花園～芝棟・草屋根を日本と世界に訪ねて～……………31

令和6年度臨時総会議事録…32 第18期第9・10回理事会議事録…33 会員の異動…48 賛助会員名簿…49



写真：2011年の津波で海岸林が倒壊した後に、天然更新したマツ林の調査の様子

津波被災地で卒業研究に取り組んだ6人目の学生。2024年9月の調査では、大きいマツは6m以上の樹高になり、計測もたいへんになってきました。広島から仙台までの移動はたいへんですが、みんな頑張ってくれています。本誌にも掲載された成果もあります。学生たちとこれからも調査を継続していきたいと思っています。

（岡浩平，P16-17の研究ノート参照）

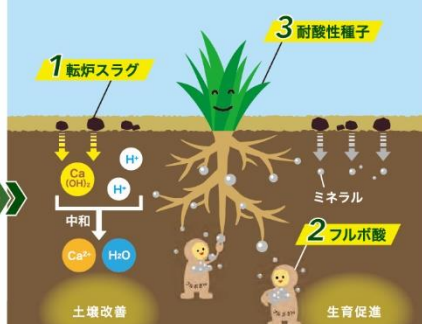
3つの特長で強酸性土壌を長期的に緑化!

強酸性土壌では…

pHとは 土中の水素イオン濃度の事。
水素イオン濃度が高い程、pHが低くなる。



グリーンスラッガーを使うと!



1 転炉スラグにより 土壌改善 (中和効果) 2 フルボ酸による 生育促進 3 耐酸性種子の 活用

転炉スラグが酸性土壌を中和し、植物の育ちやすい環境に! ミネラル分も豊富に含まれます。

フルボ酸が肥料分をキレート化し、ミネラルの吸収効率UP!

酸性環境に強い種子を活用する事で、長期的な緑化を可能にします!



9月 施工5か月後



【静岡県】

pH / 3.0
勾配 / 1:1.8
土質 / 礫混じり土

4月



グリーンスラッガー フルボシリーズ

pH 3.0~5.0 の強酸性土壌の緑化に!

GREEN SLUGGER SERIES

第4回「エコプロアワード」奨励賞受賞
第6回「ジャパン・レジリエンス・アワード」
優秀レジリエンス賞受賞



前田工織株式会社

東京本社 / 〒105-0011 東京都港区芝公園2-4-1
東京営業部 芝パークビルA館12F
TEL.03-6402-3944

福井本社 / 〒919-0422 福井県坂井市春江町沖布目38-3
福井営業部 TEL.0776-51-9200

プラスチック製ラス網

プララス網

新技術情報システム (NETIS) 登録番号 HK-240004-A

吹付工に用いるプラスチック製のラス網です。
繊維製ネットのため、軽量で防錆性・付着性に優れ、
従来の亜鉛メッキ鉄線製の菱形金網の代替として使用できます。

特長 1

軽い

200g/㎡と軽量で、
設置作業等の負担が
軽減されます。



特長 2

錆びない

耐薬品性のある
化学繊維で構成
錆が発生しません。



特長 3

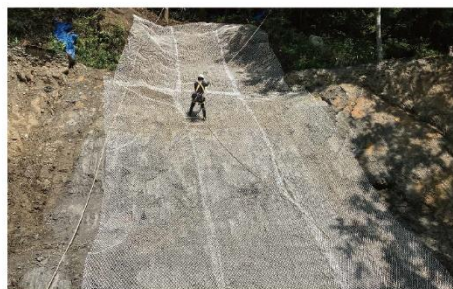
付着性抜群

ネット材にパイルを有しているため、
モルタルが絡みやすくなり付着します。



独自の技術
このループ状が付着のポイント

モルタルが
しっかり
付着して
液だれしない



「第56回日本緑化工学会大会」案内（第3報）

第56回日本緑化工学会大会運営委員長 今西 純一

第56回日本緑化工学会大会を2025年（令和7年）9月8日（月）～10日（水）に京都大学芝蘭会館及び大阪・関西万博会場で開催いたします。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

まだ参加申込なさっておられない皆様も、当日料金でご参加いただけます。ただし、現地見学会は定員に達したため受付を終了しています。

本案内（第3報）では、主に大会プログラムについてお知らせします。

その他詳細については、下記 URL からご確認ください。

第56回日本緑化工学会大会 開催のご案内

<https://www.jsrt.jp/taikai.html>

1. 大会プログラム

(1) 日程：2025年（令和7年）9月8日（月）～10日（水）

1日目 2025年9月8日（月）

9:15	大会受付開始
10:00	開会挨拶
10:15～11:00	ポスター発表コアタイム A
11:15～12:45	研究集会(1), (2)
12:45～14:00	評議員会
14:00～15:15	総会，学会賞授賞式
15:30～17:30	公開シンポジウム
17:45～19:30	情報交換会
10:15～17:30	ポスター展示，企業展示

2日目 2025年9月9日（火）

9:00～10:00	口頭発表(1)
10:00～11:00	口頭発表(2), (3)
11:00～11:45	ポスター発表コアタイム B
12:00～13:30	研究集会(3), (4)
13:45～15:00	口頭発表(4)
13:45～15:15	研究集会(5)
15:15～15:45	優秀ポスター賞授賞式，閉会挨拶
8:45～14:00	ポスター展示，企業展示

3日目 2025年9月10日(水)

8:50 大阪・関西万博会場 東エントランス広場 集合

9:30～11:30※ 現地見学

11:30～※ 大阪・関西万博会場の自由見学, 自由解散

※ 当日の混雑状況により, 現地見学会の開始・終了時刻が前後する可能性があります。

(2) 1・2日目タイムテーブル

9月8日(月)

	8			9			10			11			12			13			14			15			16			17			18			19		
場所	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30			
2階ホール前				受付																																
稲盛ホール※				開会式						研究集会(1)						総会・授賞式						シンポジウム														
山内ホール										研究集会(2)			評議員会			使用不可（情報交換会準備のため）															情報交換会					
2階ロビー				ポスター コアタイムA			ポスター，企業展示																													
別館研修室 1				休憩室												理事会で使用			休憩室																	
1階応接室	（大会本部）																																			

9月9日(火)

	8			9			10			11			12			13			14			15			16			17			18			19			
場所	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30	45	0	15	30
2階ホール前	受付																																				
稲盛ホール※	口頭発表(1)			口頭発表(2)						研究会集(3)						口頭発表(4)			ポスター賞授賞式・閉会式																		
山内ホール	使用不可			口頭発表(3)						研究会集(4)			研究会集(5)																								
2階ロビー	ポスター、企業展示						ポスター コアタイムB			ポスター、企業展示																											
別館研修室 1	休憩室																																				
1階応接室	(大会本部)																																				

※ 稲盛ホール内での飲食は一切禁止されています。

(3) 会場までのアクセス

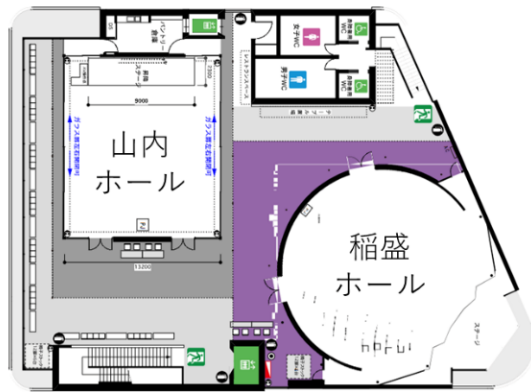
1・2日目 京都大学芝蘭会館・別館(京都市左京区吉田近衛町・吉田牛ノ宮町)

<https://www.med.kyoto-u.ac.jp/facilities/shiran/access/>

3日目 大阪・関西万博会場(大阪市此花区夢洲)

<https://www.expo2025.or.jp/expo-map-index/access/>

(4) 1・2日目会場 芝蘭会館 2階平面図



稲盛ホール内は飲食禁止です。

芝蘭会館ウェブサイトの図を改変して掲載
<https://www.med.kyoto-u.ac.jp/assets/files/facilities/shiran/guidance/figure02.pdf>

(5) 別館2階 研修室1（休憩室）へのアクセス

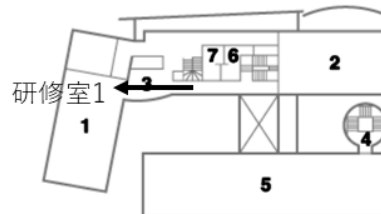
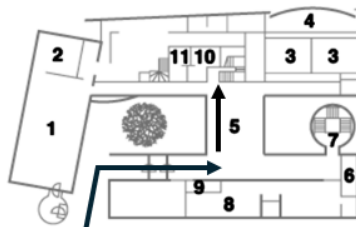
芝蘭会館別館

1階

- | | |
|---------------|----------|
| 1.カフェ | 7.EV |
| 2.カフェ個室 | 8.芝蘭会事務局 |
| 3.和室 | 産学情報交流部 |
| 4.日本庭園 | 9.受付 |
| 5.ロビー | 10.男子便所 |
| 6.自販機コーナー・喫煙室 | 11.女子便所 |

2階

- | | |
|--------|--------|
| 1.研修室1 | 5.宿泊室 |
| 2.研修室2 | 6.男子便所 |
| 3.ホワイエ | 7.女子便所 |
| 4.EV | |



- ②カフェの右横を抜け、建物に入り、2階へ。 ③2階研修室1が休憩室です。Wi-Fiも使えます。
- ①車両等に気をつけて道路を横断します。

芝蘭会館

芝蘭会館別館ウェブサイトの図を改変して掲載
<https://www.shirankai.or.jp/facilities/guide/floor/index.html>

(6) 1・2日目会場のWi-Fiについて

Wi-Fiは京都大学芝蘭会館別館2階の研修室1（休憩室）で使用可能です。主会場となる京都大学芝蘭会館ではeduroamのみを使用可能ですので、ご注意ください。大学関係者はeduroamを使用できますが、事前の設定や当日の接続方法については各自の所属大学からの案内をご確認ください。

2. 口頭発表（論文，技術報告）

口頭発表プログラム

A: 論文, T: 技術報告

口頭発表(1)

9月9日(火)	9:00-10:00	稲盛ホール	座長：福井 亘（京都府立大学）
No	タイトル	著者	
O-01-A	モバイルレーザーによる森林内空間と微気象との関係	富田明花・加藤 顕・森本淳子・石山信夫・崎山智樹	
O-02-A	ドローンレーザーで作成した樹冠高モデルから森林内ササ分布の推定	加藤 顕・菊地未宙・澤田義人・蝦名益仁	
O-03-A	滋賀県大津市旧仰木村における柿(<i>Diospyros kaki</i> Thunb.)の分布と利用の変化	川東夏子・大原 歩・中井美波・深町加津枝	
O-04-T	公園の施設と高木の3次元モデル作成手法に関する研究	金 甫炫・飯塚康雄・森岡千恵	

口頭発表(2)

9月9日(火)	10:00-11:00	稲盛ホール	座長：大塚芳嵩（大阪公立大学）
No	タイトル	著者	
O-05-A	張芝工による外来草本植物の根系を含む土供試体のせん断特性と法面方位の影響	宗岡寿美・内藤綾乃・山崎由理・小林健嗣・永井 晶・中島直久・木村賢人	
O-06-A	表層崩壊後のレガシー活用緑化における初期の植生回復プロセス	重野真修・春口菜帆・厚井高志・桂 信也・石山信雄・森本淳子	
O-07-T	施工から7年経過した緑化植物の根茎の調査	佐藤厚子・山木正彦	
O-08-T	令和6年能登半島地震による奥能登丘陵尾根付近の微地形への影響	中村華子	

口頭発表(3)

9月9日(火)	10:00-11:00	山内ホール	座長：岡田準人（大阪産業大学）
No	タイトル	著者	
O-09-A	トンボ幼虫の個体数に影響を与える水草・水質・周辺環境	出口敬涼・福澤加里部・崎山智樹・石山信雄・森本淳子	
O-10-T	圧縮空気によるエアレーションがシラカン苗木の生育に及ぼす影響	高橋輝昌・磯 和華・石井匡志・荻野淳司	
O-11-T	植物の長さや葉面積による炭素固定量の簡易推定法の検討	尾上 萌・中村真優・高橋輝昌・中村純子・関根大樹・荒井幸司	
O-12-T	建築物屋上における多肉植物セダム2種の逸出リスクの評価	中村嘉一・高橋 興・青山恭久・笠松滋久・山本高広・石塚正秀・小宅由似	

口頭発表(4)

9月9日(火)	13:45-15:00	稲盛ホール	座長：小宅由似（香川大学）
No	タイトル	著者	
O-13-A	千葉県太平洋岸における離岸堤設置が外洋性海浜の植生に与える影響	成川央庸・山田大我・甲野耀登・大黒俊哉	
O-14-T	メッシュシート被覆によるオオイタドリ (<i>Fallopia sachalinensis</i> (F. Schmidt.) Ronse Decr.) の地下茎の抑制に関する調査	佐藤厚子・山木正彦・石田健一・樋口法大	
O-15-T	公園を活用した園芸療法プログラムによる心理的効果の検証	林 まゆみ・丸目みずず・福田栄子・根来文恵	
O-16-T	秋田県に自生する在来種を使った緑化工事の事例報告	沓澤 武・吉原敬嗣	
O-17-T	炭素貯留を目的としたバイオ炭が緑化樹木の肥大成長および樹高成長に及ぼす影響の評価	大西竹志・石黒一弘・根津郁実・石栗 太	

口頭発表要領

1. PC 接続環境

- 会場には Windows PC を設置しており、PowerPoint あるいは PDF で発表可能です。使用される場合は、USB メモリ等でデータをご準備ください。
- ご自身の PC を持ち込まれる場合、HDMI あるいは RGB ケーブルによる接続が可能です。必要に応じてアダプタ等をご持参ください。

2. 発表時間

発表・質疑時間は1題あたり14分（発表12分、質疑2分）、発表者の交代時間は1分を想定しています。セッションごとに座長を設定していますので、当日は座長の進行に従ってください。

3. ポスター発表（論文，技術報告，研究交流発表）

ポスター発表プログラム

コアタイムA：Day 1 (9/8) 10:15-11:00

ポスター番号末尾

コアタイムB：Day 2 (9/9) 11:00-11:45

A: 論文, T: 技術報告, R: 研究交流発表

番号	タイトル	著者	発表日
P-01-A	定年退職後の初期に参加する社会活動における農的活動の効果	那須 守・星田遼太・岩崎 寛	Day 1
P-02-A	事業所規模およびワークスタイルから見たオフィス緑化の現状と勤務者の満足感	梅原瑞幾・岩崎 寛	Day 2
P-03-A	天然芝および人工芝を歩行した際の生理・心理的效果に関する基礎的研究	星田遼太・岩崎 寛	Day 1
P-04-A	間伐と間伐木を利用した筋工設置を行ったスギ・ヒノキ林における8年間の表土移動	島田博匡・沼本晋也・野々田稔郎	Day 2
P-05-A	草本植物根系が斜面表層の安定性に及ぼす影響に関する基礎的研究	矢尾板晃弘・中村 大・横井竜馬・川口貴之・川尻峻三・宗岡寿美	Day 1
P-06-A	令和元年房総半島台風によるマテバシイの根返りに影響した根鉢厚と樹冠形の検討	白雪・小林達明・高橋輝昌	Day 2
P-07-A	陣場山山頂に植栽したアキノキリンソウおよびコオニユリの当年性苗の3年間の生育状況	山田 晋・濱田耕太郎・伊藤在由・川口征也・丸山 元	Day 1
P-08-A	二次林林床における非選択下刈りが常緑性多年草ヤブラン (<i>Liriope platyphylla</i> F.T.Wang et Tang) の生育・着花に及ぼす影響	中島宏昭	Day 2
P-09-A	東北地方太平洋沖地震に伴う地盤の沈降と隆起がイヌセンブリの分布に与えた影響	宮本寛史・岡 浩平・松島 肇・黒沢高秀・平吹喜彦	Day 1
P-10-A	湿原再生地における成立植生に係る要因―未利用農地地盤切り下げ事業地の事例―	中谷智喜・福澤加里部・田崎冬記・川嶋啓太・石山信雄・森本淳子	Day 2
P-11-A	日別降水量から算出した先行降雨指数APIによる緑化のための全国の乾燥特性評価	中村彰宏・中桐貴生・植山雅仁	Day 1
P-12-A	温暖化する北海道に適した植生工の検討	横井竜馬・中村 大・矢尾板晃弘・佐々木裕一・葛蒲哲也・宗岡寿美	Day 2
P-13-A	北海道におけるスズランの葉緑体ゲノムの遺伝変異とそれら分布の地域間差	我妻尚広・森 志郎・原 悠里・岡本吉弘	Day 1
P-14-T	建設工事現場の仮囲い緑化に対する印象評価	田中花佳・岩崎 寛	Day 2
P-15-T	個人デスクへの植物設置が勤務者の心理に与える効果―本物とフェイク植物による比較	吉原裕人・小笠原秀治・荒井菜穂美・那須 守・岩崎 寛	Day 1
P-16-T	トチノキ (<i>Aesculus turbinata</i> Blume) 個体群の開花期間における養蜂巣箱の連続重量計測システムの構築	飯田義彦	Day 2
P-17-T	北海道に生育するカタクリの葉緑体ゲノムtrnL intron およびtrnL 3' exon - trnF 領域の遺伝変異	我妻尚広・春木龍央・森 志郎・東 隆行・岡本吉弘	Day 1
P-18-T	落ち葉敷きの雨庭における土壌動物相と雨水浸透性能のモニタリング	相澤章仁・伊東雄樹・長野龍平	Day 2
P-19-T	丘陵地における微地形および植生管理に応じた土壌動物相の差異	石毛茉希・橋川 慧・山田 晋	Day 1
P-20-T	高速道路緑地の点検支援を目的としたマニュアル作成とシステム開発	清水海優・太田英治	Day 2
P-21-T	マテバシイ風倒被害林での在来常緑樹苗木の初期生育	銭谷卓人・高橋輝昌・小林達明	Day 1
P-22-T	多段式プランター型壁面緑化の炭素固定量の測定	尾上 萌・高橋輝昌・中村真優・中村純子・関根大樹・荒井幸司	Day 2
P-23-T	海岸・海崖に近い舗装道路脇の間隙における海崖植物の生育事例	村上健太郎・丸山貴太・斎藤 匠	Day 1
P-24-T	釧路湿原幌呂地区における地盤切下げ後の植生変化	田崎冬記・川嶋啓太・青木菜々花・稲垣乃吾・神田房行	Day 2

番号	タイトル	著者	発表日
P-25-R	横浜横須賀道路金沢支線 能見堂トンネル上部の植生復元に関する報告	築瀬知史・仁藤 健・大井美穂	Day 1
P-26-R	狭小街路向けの「新しい街路樹用中高木剪定マニュアル」の作成	長嶋大貴・福原修斗・三橋勇太・佐藤澄仁	Day 2
P-27-R	低茎水辺植物の生育の維持と栄養塩の関係	辻 盛生	Day 1
P-28-R	人工給水による大山緑地の長期的湿地維持機能の検証	辻 修・堤 公宏・中島 直久	Day 2
P-29-R	猪苗代湖南部の防風湖畔林の分布及び樹林構成	大澤啓志・上野可蓮	Day 1
P-30-R	埋立地の芝生地における新植栽木と芝生地に侵入した周辺の既存植栽木の根系	広永勇三	Day 2
P-31-R	植栽法面における緑化20-36年後の下層植生の特徴	小宅由似	Day 1
P-32-R	着生ランの移植による保全の試みーカヤラン移植5年経過から見えてきたことー	水野崇行・浦田光章・今関哲夫・蘭光健人・山下由美	Day 2
P-33-R	里山林における林冠種と樹種多様性が生態系サービス価値に与える影響ーi-Tree Ecoによる金銭的評価	江口則和・高原 凜・佐藤加奈・小寺樹生・佐藤 晴	Day 1
P-34-R	間伐による立木密度の違いがヒノキ単木の根系生長に及ぼす影響	大野千星織・初芝達也・三本 恵・登坂拓矢・佐藤貴紀・橋 隆一	Day 2
P-35-R	炭酸化した木質バイオマス焼却主灰を含む植生基盤材に植栽したコウライシバの生育評価	小林紀子・織邊尚子・繁泉恒河	Day 1
P-36-R	バイオ炭混合土壌が植物生育に与える影響の評価	石崎琢也・織邊尚子・小林紀子	Day 2
P-37-R	異なる光条件下で生育したコナラとアベマキの実生苗木における貯蔵炭水化物が萌芽の発生に与える影響	新名啓太・桐本留奈・小坂茉那・西崎真子・小笠真由美・三木直子	Day 1
P-38-R	保存状態の違いが地域性種苗(チガヤ)の発芽に及ぼす影響	西村 倉・中島敦司	Day 2
P-39-R	燃焼時間の違いがヨシススキの再生に及ぼす影響の検証	榎本 唯・中島敦司	Day 1
P-40-R	石礫層の厚い生育基盤の透水性がクロマツとタブノキの引き倒し抵抗性に与える影響	佐々木綾香・佐藤貴紀・橋 隆一	Day 2
P-41-R	土壌表面付近における酸素濃度の変化	岸本大地・大西智貴・中島敦司	Day 1
P-42-R	マツ菌根菌の影響を受けた土壌の浸透能に関する実験	小川泰浩・明間民央	Day 2
P-43-R	草本植物の根系を含むマサ土の強度特性	末武侑大・落合博貴・佐藤貴紀・橋 隆一	Day 1
P-44-R	シカの食害で斜面植生が変化しても樹木根系による土壌補強強度は変わらないのか?ーオオバアサガラとケヤマハンノキの水平根引き抜き抵抗力の比較ー	佐久間楽奈・佐藤貴紀・橋 隆一	Day 2
P-45-R	シカ不嗜好性植物アセビの水平根による伸長方向別の土壌補強強度	奈良きらり・佐藤貴紀・橋 隆一	Day 1
P-46-R	クサヨシを利用した植生工の表流水に対する侵食防止効果に関する基礎的研究	堤 経心・中村 大・村上悠一郎・館山瑛地	Day 2
P-47-R	砂質土からなる盛土法面に対する植生シート工の侵食防止効果の解明	館山瑛地・中村 大・村上悠一郎・堤 経心	Day 1
P-48-R	砂草帯の砂丘地形の勾配の違いが海岸林およびその後方の飛砂捕捉量に与える影響	鈴木ひかり・菊池俊一	Day 2
P-49-R	耐降雨性に優れた環境配慮型植生工法ー施工実績:大阪万博 静けさの森(在来種客土吹付工法)ー	鈴木 翔・竹内 健一	Day 2
P-50-R	物理特性の異なる道路舗装材に応じた無脊椎動物群集の応答	山元駿介・平岩将良・早坂大亮	Day 2
P-51-R	大阪府南部の古墳・神社・都市公園におけるアリ類多様性の比較	今西亜友美・今西純一	Day 1
P-52-R	堺市的前方後円墳「黒姫山古墳」の墳丘樹木群落の種組成および構造	吉田 葵・中村彰宏	Day 2
P-53-R	閉鎖空間における観葉植物ボトスの空気改善機能の評価	安藤穂歩・山本高広・小宅由似	Day 1
P-54-R	在来コケ植物によるPhytoremediationの可能性	浅井俊光・水野百音	Day 2
P-55-R	在来種の追加植栽による人工島緑化地の植生の変化	奥山颯大・柏木圭太・川田直人・任 睿・石井弘明	Day 1

番号	タイトル	著者	発表日
P-56-R	深層学習を用いたツルヒヨドリ発見手法の検討	徳丸慶太郎・久高紘大・出岐大空・ 梅林俊太郎・仲宗根早海・ Meza Tudela Alejandro	Day 2
P-57-R	茨城県つくば市全域を対象としたナガミヒナゲシ(<i>Papaver dubium</i>)の目視調査による空間的可視化と出現状況の傾向	吉川慎平・吉川千春・小田幸子	Day 1
P-58-R	自治体発信のナガミヒナゲシ(<i>Papaver dubium</i>)に関する注意喚起情報の追跡調査結果とキーワード検索需要の傾向分析	吉川慎平・小田幸子・吉川千春	Day 2
P-59-R	睡眠の質の向上に寄与する日常行動及び地域環境の検討	惣田すず佳・大塚芳嵩・今西純一	Day 1
P-60-R	東京都23区内の民間再開発の緑地における利用ニーズの実態把握	鷲見泰弘・横田樹広・上野裕介	Day 2
P-61-R	うめきた公園における緑の多面的機能の検討	岡田準人・山本 聡・大塚芳嵩	Day 1
P-62-R	能登半島地震被災地の仮設住宅団地に整備されたオープンスペースの効果検証	手代木 純	Day 2

ポスター作成・発表要領

- ポスターサイズ
 - サイズは A0 (縦 1189 mm×横 841mm) のスペースに収まるように作成してください。
- ポスター掲示方法
 - 各自指定のスペースへ貼り付けをお願いします。なお、貼り付けに必要な道具は大会運営委員会で用意致します。
- ポスターの掲示開始時刻
 - 掲示は 9 月 8 日 (月) 朝 9 時半頃から可能となります。
※時間は変更の可能性があります。
- ポスター発表コアタイム
 - コアタイム A は 9 月 8 日 (月) 10:15~11:00, コアタイム B は 9 月 9 日 (火) 11:00~11:45 です。
 - 発表者は、指定されたポスターコアタイムにポスターの前に立ち、説明や質疑応答を行ってください。
- ポスターの取り外し
 - 9 月 9 日 (火) 14 時までには必ずポスターを取り外し、お持ち帰りください。なお、ポスター等の廃棄は、大学内で行わないでください。取り外されていないポスターのある場合には、大会運営委員会で処分することがございます。予めご了承ください。
- 優秀ポスター賞の表彰
 - 応募者は、優秀ポスター賞表彰式まで会場にお残りください。

4. 公開シンポジウム

「緑化の未来を拓く！森林・草地生態系における植物群集形成の科学」

日時：2025年9月8日（月）15:30～17:30

会場：稲盛ホール

概要：

生物多様性保全への意識の高まりとともに、緑化においても生物多様性への配慮がより一層求められるようになっていきます。これまでに地域の自然をモデルにして樹林や草地の形成が行われた事例はありましたが、今後はそのような事例が増えて行くと予想されます。様々な緑化の手法が開発され、取り扱い実績のある植物の数も増えてきている中で、緑化によって形成可能な植物群集も多様になり、地域の自然をモデルにした緑化も実現しやすくなりつつあります。しかし一方で、目標とする植物群集を確実に形成できるという段階にはまだ至っておらず、実現には様々な課題を抱えています。本シンポジウムでは、森林生態学や草地生態学の分野で活躍する研究者を迎え、地域の自然をモデルにした緑化における目標設定、緑化や植生管理のあり方、実践事例についてご講演をいただいた後、討論を行います。植物群集形成の科学という視点から、緑化の未来を見据える機会にしたいと思えます。

司会・趣旨説明	今西純一（京都大学）
講演 森林生態系の視点から	石井弘明（神戸大学）
講演 草地生態系の視点から	山田 晋（東京農業大学）
講演 実践事例とその課題	橋本佳延（兵庫県立人と自然の博物館）
討論	

5. 研究集会

研究集会(1)「緑化工学を活かした災害復興支援を考える」

日時：2025年9月8日（月）11:15～12:45

会場：稲盛ホール

企画者：災害対応検討委員会（仮称）

代表者：上野裕介（石川県立大学）

概要：

頻発・激甚化する自然災害に対し、緑化工学は何ができるのか。日本緑化工学会では「災害対応検討委員会（仮称）」を新設し、より良い防災・復興支援の在り方の議論を開始した。本集会では、委員会の設立趣旨と活動方針を広く共有するとともに、過去の災害対応の知見を交えながら、現在進行中の能登半島地震・豪雨からのグリーンインフラ復興の取り組みを一事例として紹介し、緑化工学が果たす役割と可能性を多角的に議論する。

研究集会(2)「生態系創出資材としてのバイオクラストの可能性を考える」

日時：2025年9月8日（月）11:15～12:45

会場：山内ホール

企画代表者：木村圭一（国立環境研究所）

概要：

土壌藻類やコケ類が地表面に形成するバイオクラスト（BSC）は植物と同様の生態系機能を持ちながら、植物より環境ストレス耐性が高い。このため乾燥地やのり面を中心に植生導入に代わる土地修復法として期待されているが、その適用可能な環境には一考の余地がある。本集会ではバイオクラストについて概説したのち、のり面、乾燥地、極地、果ては宇宙と、環境が全く異なるバイオクラストに関連する研究や活動を紹介する。最後に様々な環境に適用可能な生態系再生・創出ツールとしてのバイオクラストの可能性と課題を議論する。

研究集会(3)「緑化植物・地域性種苗のよりよい使用に向けて」

日時：2025年9月9日（火）12:00～13:30

会場：稲盛ホール

企画者：生態・環境緑化研究部会

代表者：中島敦司（和歌山大学）

担当者：中村華子（金沢大学）

概要：

生態・環境緑化研究部会で進めてきた各プロジェクト、担当者の研究成果では、あらためて緑化植物の有用性を確認することにもなった。適切な取り扱いを行うことで効率的かつハイパフォーマンスな緑化は実現性が高い。そこで今回改めて「適切な種子の取り扱い」を整理したい。

研究集会(4)「OECMで生きる！都市・農村地域における生物多様性の保全と再生」

日時：2025年9月9日（火）12:00～13:30

会場：山内ホール

企画代表者：今西亜友美（近畿大学）

概要：

近年、国際的な生物多様性保全の枠組みにおいて、OECMの重要性が注目されており、日本においても自然共生サイトの認定が進められている。こうした取り組みは、都市域や農村など、従来は保全対象とされにくかった空間にも新たな意義をもたらしている。

本研究集会では、都市・農村域を対象として、個別の保全対象を超えた地域レベルでの生物多様性の保全と再生の可能性について議論を深める。さらに、行政・研究者・地域実践者の連携による保全の在り方や、生物多様性の主流化に向けた自然共生サイトの活用方法を模索し、持続可能な地域づくりに資する知見の共有を目的とする。

研究集会(5)「技術交流会 自生種苗（地域性種苗）の功罪について」

日時：2025年9月9日（火）13:45～15:15

会場：山内ホール

企画代表者：築瀬知史（東日本高速道路）

概要：

日本道路公団は、平成4年度（1992）に高速道路周辺に自生する樹木の苗木（自生種苗と呼称）を使用できるか否か、自主研究に着手した。世の中では、平成16年に外来生物法が公布、吹付で使う牧草が要注意外来生物に記載。日本緑化工学会では、法律に呼応するかのように、草本を含めた名称として地域性種苗と名付けた。パブコメでは、賛否入り乱れての議論となったが、法律の上を行き、要注意リスト上の植物の使用も制限するという意見が多くを占め主流となっている。これらの記載にはとらわれず、様々な線引きについて、若手技術者限定でグループディスカッションを行います。シニアは、オブザーバー参加又はお手伝いをお願いします。

6. 企業展示（資材・工法展示）

日時：2025年9月8日（月）10:15～17:30

9日（火）8:45～14:00

会場：芝蘭会館2階ロビー

出展者（50音順）：

株式会社 グリーンエルム

グリーン産業 株式会社

日本工営 株式会社

ロンタイ 株式会社

7. 現地見学会

「大阪・関西万博における未来の緑の活用と管理」

(1) 概要

2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）が大阪の夢洲で開催されます。現在、大阪では、JR大阪駅、阪急・阪神・大阪メトロ梅田駅など交通の中心部でもある場所において、グラングリーン大阪やグランフロント大阪といった経済活動の大きな場を初め、緑豊かな空間づくりが産官学によって実装されてきています。また、大阪府内でも府営公園や市営公園の緑化の取り組みを初め、グリーンインフラの実装による緑の都市空間が作られてきています。

そのような中で今回開催される大阪・関西万博のコンセプトは「People's Living Lab 未来社会の実験場」です。「緑」にも着目されており、会場の様々な場において緑の利活用が

推し進められています。本大会の現地見学会では「大阪・関西万博における未来の緑の活用と管理」をテーマに、これから先の未来の緑のあり方、利活用の仕方について見て学びます。加えて、夢洲という海上会場といった環境での緑の管理について見ていただこうと考えております。現地では、大阪・関西万博の管理運営を進めてきた公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会の担当者、また施工管理をしている企業の担当者から、それぞれ説明していただくことになっています。

未来に向けた大阪・関西万博の「みどり」を実際に会場で見えて感じましょう。

(2) 実施日時

2025 年 9 月 10 日（水）

8:50	大阪・関西万博会場 東エントランス広場 集合
9:30～11:30※	全体概要 公社）2025 年日本国際博覧会協会 石田紘之 氏 大屋根リング上部植栽 大和リース（株） 山舗和徳 氏 静けさの森 （株）日建設計 岩田友紀 氏 森になる建築 （株）竹中工務店 槌尾 健 氏
11:30～※	大阪・関西万博会場の自由見学、自由解散

※ 当日の混雑状況により、現地見学会の開始・終了時刻が前後する可能性があります。

8. 大会運営委員会

委員長：今西純一（京都大学）

委員：貫名 涼（京都大学）、深町加津枝（京都大学）、福井 亘（京都府立大学）、
岡田準人（大阪産業大学）

〔事務局連絡先〕

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院 農学研究科 森林科学専攻 環境デザイン学研究室内

第 56 回日本緑化工学会大会事務局

TEL：075-753-6099（貫名） FAX：075-753-6082

メール：ryokkako.taikai.56★gmail.com

※メールアドレスの★は@に置き換えてください。

新技術で社会に貢献
次世代の地球環境保全へ向けて展開

コンサルティング事業

斜面防災／治山・林道／河川・砂防・海岸
地盤環境／環境・緑化

インフラ整備・メンテナンス

地すべり防止工事／斜面・のり面工事
インフラメンテナンス

研究開発

InSAR／BIM・CIM
シミュレーション技術／空間情報技術

ISO 9001 登録



国土防災技術株式会社

URL:<https://www.jce.co.jp/>

本社：〒105-0001 東京都港区虎ノ門3丁目18番5号 TEL: 03-3436-3673(代) FAX: 03-3432-3787

研究ノート Research Note

東日本大震災から私は何を学んだか？

岡 浩平

広島工業大学環境学部／海岸林・沿岸域緑化研究部会 (k.oka.gw@cc.it-hiroshima.ac.jp)

本題に入る前に

研究ノートのコラムは、8 つある研究部会がローテーションで担当しています。今号は、海岸林・沿岸域緑化研究部会の担当になります。私より若いメンバーに執筆を押し付けようと企んでいましたが、前号の岩崎先生と倉本先生の原稿でハードルが上がってしまったようで、腰が引けてしまったようでした。私も同じなので、困ってしまいました。お二人のように、さりげなく自身の研究成果を盛り込みつつ、読み手に響く文章は書けませんが、私が取り組んできた東日本大震災の話題を紹介したいと思います。

初めて宮城県を訪れたのは 2011 年 10 月でした。日本海岸林学会の現地検討会の際に、津波が襲来した海岸林の様子を視察しました。被災した海岸の様子を目の当たりにして、研究を通して、被災地の復興に貢献したいと強く思ったことを記憶しています。ただ、2011 年は広島での教員生活 1 年目でもあったため、授業準備に追われる毎日でほとんど身動きが取れませんでした。翌年の 2012 年に科研費に採択されて、津波被災地での海岸研究に専念できる機会に恵まれました。科研費の採択を知ったときは、初めての外部資金の獲得でもあったため、今までの研究生活を肯定してもらったような気持ちになりました。

2012 年 8 月には宮城県の海岸を見て回りました。あちこちで復旧工事が行われていて、土地勘もまったくなかったので、アクセスしづらいところはタクシーを使いました。ある日の朝、タクシーに乗車したところ、運転手の方に何しに来たのか質問されました。津波の傷跡がまだ強く残る中、「海岸の植物を調べに来た」とはなかなか言いづらく、そんな場合ではないとお叱りを受けても仕方がないと思いながら、素直に理由を答えました。すると、「わざわざ遠くからありがとう」と感謝され、「海岸は暑いから」とバックの牛乳を頂きました(写真-1)。なぜ牛乳？という疑問はあったものの、何かしてあげたいという気持ちは十分に伝わってきました。同時に、地元の方からも自分の研究が肯定されたような気がして、研究を通して復興に貢献したい気持ちはさらに高まりました。それから 10 年以上が経過しましたが、復興に貢献できたという手ごたえはまったくなく、むしろ地元の方に助けられ続けて、今に至ってしまっています。

東日本大震災で驚いた 3 つのこと

東日本大震災に関連したことで驚いたことが大きく 3 つあります。建物や海岸林が倒壊した様子はやはり衝撃を受けま

した。大きな樹木の幹が折れたり、根ごと倒れて流されたりしており、津波の破壊力に驚かされました。海岸林は強風や高潮などから後背地の暮らしを守る存在とし、その意義を論文の背景や目的で繰り返し書いてきました。それが一瞬にして失われた光景は、海岸林の存在意義が改めて問われているようにも感じました。

次に驚いたことは、震災の翌年には防潮堤や海岸林の復旧工事が始まり、それが短期間のうちに完成したことです。調査に訪れるたびに、防潮堤が伸びていき、海岸林造成のための盛土が海岸に広がっていきました。人が自然に働きかけるインパクトも、すさまじいものがあることを目の当たりにしました。海浜植物のハマボウフウが木杭で囲われている工事現場もありました(写真-2)。あのハマボウフウは、今どこでどうしているのでしょうか。海岸の植物を保全したくて研究を続けてきましたので、海岸に人工物が増えていく様子を複雑な気持ちで眺めていました。



写真-1 タクシー運転手の方から頂いた牛乳 (2012 年 8 月)



写真-2 工事現場のハマボウフウ (2013 年 5 月)

最近ではグリーンインフラが注目されていますが、生態系には多機能性が備わっていることが重要と言われます。例えば、海岸クロマツ林は、防風・防砂の機能だけでなく、景観形成や環境教育、二酸化炭素の固定、生物多様性保全などの多様な機能があります。

一方、コンクリートに代表されるグレーインフラは、単一機能に優れると言われます。当初、私も防潮堤はその名の通り、津波などからの防潮効果だけに優れると思っていました。しかし、実際に出来上がると、散歩の利用や日焼けに訪れる人がいたり、意外な利用方法があることを知りました。私も調査の際は、砂浜よりも歩きやすいので、防潮堤の上を移動したり、調査地の全景を撮影したりするのに活用しています。これまた複雑な気持ちはありますが、あるものは有効に活用する柔軟性を学んだような気がしています。大規模な災害が毎年のように起きていますので、防災と環境保全をどのように両立していくのかは、ますます重要になっていくと思われる。その最適解を地域ごとに模索する際には、緑化工学の知見や技術が求められる場面も増えていくはずだ。

最後に驚いたことは、津波のあとに動植物がすばやく回復していったことです。倒壊した海岸林を調べてみると、津波で流されてきたか、もしくは埋土種子から発芽した海浜植物が震災直後から花を咲かせて、たくましく生育していました。震災から数年後には、マツの稚樹も目立つようになり、7年が経過する頃には人の背丈をこす高さまで成長していました(写真-3)。

津波で樹木が根返りした跡地は、地盤沈下が生じたことも相まって、多様な湿生の植物が生育する場所になりました(写真-4)。ヒメガマやヨシ、カモノハシなどの湿生草原に、タコノアシやイヌセンブリなどの絶滅危惧種もところどころに混生しています。

津波後に生態系がすばやく、そしてたくましく回復するなか、海岸では同時進行的に復旧・復興工事が実施されてきました。津波から生態系がどのように回復していくのかは、世界的にはスマトラ沖地震などの事例はあるものの、日本国内の事例は東日本大震災までは全くない状態でした。そのため、被災地の復興に生態系の回復力(レジリエンス)を積極的に活かすことは難しい状況だったかもしれません。ただし、2024年1月には能登半島地震が発生し、将来的には南海地震の発生が予想されるなど、地震大国である日本は、地震や津波から逃れることはできません。東日本大震災の教訓として、防災対策だけでなく、津波に対する生態系の応答の知見も大事にしていくべきです。

津波被災地の中には、防災対策を進めつつも、生態系にも配慮して復興工事を進めた場所もあります。仙台市の井土浜では、通常のコンクリートの防潮堤とは異なり、CSG(Cemented Sand and Gravel)工法による防潮堤が造成されています。CSGは土砂や掘削ブリなどの現地発生材にセメントと水を混合して製造したのですが、肝心なのはその表面に近くの河口の浅瀬土砂を覆砂したことです。周辺から海浜植物が侵入し、多様な海浜植物が生育する防潮堤になりました(写真-5)。表層に砂があるだけで、海浜植物の生育地になりうることは新たな発見でした。このCSG堤防は1km以

上の範囲に造成されていますので、規模の大きい自然再生と言えそうですが、総延長が約400kmの巨大防潮堤に比べてしまうと、小さな自然再生とも思えてしまいます。他にも、海岸林造成のための盛土の上に、やはり近隣の砂を覆砂した場所では、海浜植物が多いことが観察されています。

本題のあとに

2012年以降、毎年3・4回は、仙台を中心とした津波被災地での調査を継続しています。合計すると半年以上は、滞在しています。広島～仙台の飛行機が1日3便もあるから継続できているところもありますが、行かないと落ち着かない、ライフワークのような調査にもなってきました。改めて振り返ってみると、仲間の研究者の助成金にも助けてもらいながら、地元の方にもいろんな形のサポートを頂きながら、研究が継続できていることに感謝の気持ちでいっぱいです。惰性で続けるのではなく、自分にしかできない何かをこれからも模索していきたいです。



写真-3 2012年(左)と2018年(右)の被災地のマツの様子



写真-4 根返り跡地の湿生草原(2014年10月)



写真-5 施工7年後のCSG堤防の様子

鹿食害対策一体型植生マット

クサマモール

鹿の食害対策に！

植生マットと対策ネットを一体化した工法です。

食害対策ネットは、植物の成長と共に持ち上がることで、植物を食害から守ります。さらに、食害対策ネットで守られた植物は、のり面を保護し植生工としての機能が保持されます。

鹿の踏み荒らし対策には「アニマルガード工法」をおすすめします。



施工後3ヵ月

太陽と緑の国づくり
Nikon 日本植生株式会社

本社：岡山県津山市高尾573-1
TEL 0868-28-0460 FAX 0868-28-4850

営業所：青森・盛岡・仙台・東京・神奈川・栃木・新潟・名古屋・長野・金沢・大阪・岡山・広島・島根・高松・松山

それは、人を守る緑。

自然の植生を再生し、
地球環境を守る第一歩をお手伝いします

NEW!!

表層1mまでの土砂崩落抑制工法

ロンストロングネット



それは、人を守る緑。
ロンタイ株式会社

【本社】〒570-0011 大阪府守口市金田町3丁目1番11号
【TEL】(06)6902-9401 【FAX】(06)6905-9070
【支店・営業所】札幌・仙台・関東・静岡・大阪・四国・広島・福岡・鹿児島
【E-mail】info@rontai.co.jp 【ホームページ】https://www.rontai.co.jp



ロンタイは2022年9月1日、
SDGs宣言を行いました。



研究ノート Research Note

緑化の居酒屋談話その2 侵食防止剤を知っているか？の巻

田中 淳

国土防災技術株式会社 (jun-tanaka@jce.co.jp)

皆様の反響にお答えしてその2を記述できることとなりました。数名の方より感想をいただき、本当の居酒屋でも盛り上がりました。ありがとうございます。1970年代以前に行われていた緑化と表面侵食防止の研究は3つあり、前回は1つめの「植被率と侵食の関係を整理した試験」についてお話ししました。今回は、3つめの「侵食防止剤の効果確認試験」について記述したいと思います。ここで紹介する文献の古い文献の多くは、国立国会図書館デジタルコレクション⁹⁾から見る事が可能です。また、この内容は、2023年の第54回日本緑化工学会大会の研究集会4、「高強度の降雨に対応する斜面緑化を考える(II)」の話題提供の一部を活用しています。

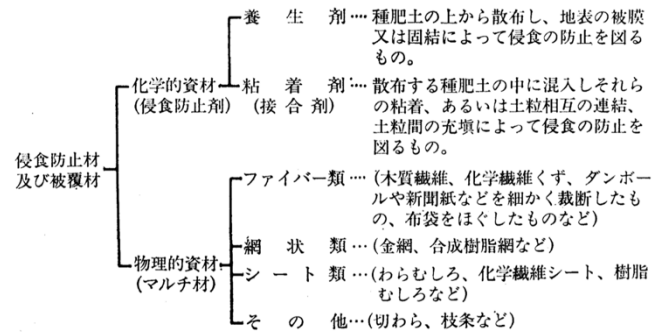
侵食防止剤とは何か？

侵食防止剤が必要と感じられた理由は、発芽生育の早い外来イネ科草本を季節的に好条件の時期に施工しても、被覆が完成するため1~2ヶ月必要であり、この期間の侵食防止を考えなくてはならないためです。この裸地の期間の保護対策として、機械式の緑化工として日本で最も早く開発された方法のたね吹付工^{11,12)}の被膜養生としても使用されていたアスファルト乳剤があります。しかし、種皮について発芽障害をもたらすこと、濃褐色で日光を吸収して表面が焼け発芽・成長阻害を引き起こすことなどから、より広く使える薬剤が開発されていきました。

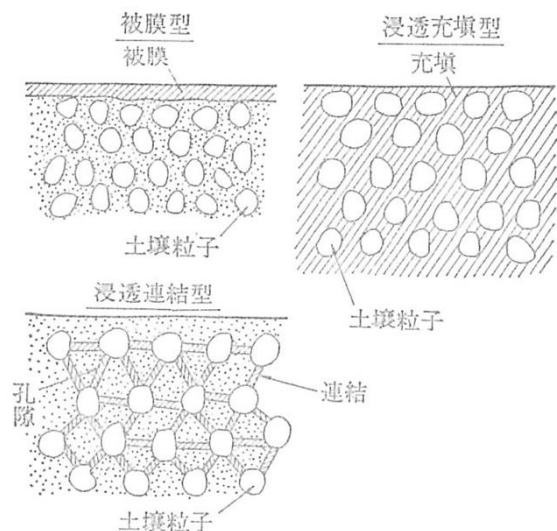
なお山寺¹⁷⁾は、このような種子や肥料を播いた上に散布して侵食を防止する材料使用方法を「養生剤」と呼び、種子や肥料、土壌分に混ぜて固結させるために使用する材料使用方法を「粘着剤」と定義しています(図-1)。これからお話しするのは、侵食防止材を斜面上の土や種子などが流れないように後から播く方法が主となるため、侵食防止剤を養生剤として使用した時の報告ということになります。後者の場合は、侵食防止剤を粘着剤として種子や肥料、土壌と共に混ぜるということになります。養生剤と粘着剤・接合剤は使用方法が異なります。用語は正しく使いたいものです。この文章中では文献タイトルを除き侵食防止剤と呼んでいきます。

山寺ら東京農業大学からの報告

侵食防止剤の試験報告は1966年¹⁴⁾の砂地における表砂移動防止の報告がはじめだと思われます。飛砂防止のために19種類の侵食防止剤の比較試験を行い報告しています。試験内容は、植物の発芽や生育、散布後の飛砂防止効果の検証です。これらの侵食防止剤は、3つに分かれる(表-1、図-2)とし、浸透-充填型は、孔隙の少ない硬い層や膜を作るため、発芽、

図-1 土壌侵食防止材の役割¹⁷⁾表-1 試験に使用した侵食防止剤の分類¹⁴⁾

区分	効果	主な資材
被膜型	表面に薄い膜をつくる	カチオン系アスファルト乳剤など
浸透型	充填型 浸透し砂粒間隙充填したり、途中で膜をつくる。	ポリビニルアルコール(PVA)、塩化ビニール、リグニン系固化材 など
	連結型 浸透し砂粒の接触部のみを連結する	ポリ酢酸ビニール

図-2 侵食防止剤の土壌への反応タイプ⁶⁾

生育に強い障害を与えると報告しています。植物導入を前提とした場合、ポリ酢酸ビニール、つぎに、アスファルト乳剤が適しているとしています。

1967年¹⁵⁾には、斜面への適用を考慮した雨滴侵食に対す

る侵食防止剤の試験を発表しています。使用した8種類の薬剤は、初年度の結果から分類した3つが含まれるように選んでいます。「被膜型は表面の被膜が強いうちは侵食がほとんどされないが、リルが生じると被膜に透水性がないため地表水が集中し深く侵食されやすい。浸透型は充填・連結型にかかわらず地表の膜が薄い部分が全面侵食され易いがリルの発達には少ない。また、初期（一ヶ月程度）効果は被膜型が選り、浸透型（充填・連結）は、表面近くに硬化層をつくるものほど初期効果が大きい。」と報告しています。さらに「浸透型（充填・連結）は硬化に時間がかかり、硬化までの期間に降雨があるとその硬化が低下する。」ことなどが述べられています。

この試験は植物を使用せず単純に侵食防止機能のみを評価していますが、1969年¹⁶⁾の報告では、酢酸ビニールについて詳細な報告をしています。1969年の報告と併せて考えれば、緑化の侵食防止剤として使用が適しているのは浸透・連結型の酢酸ビニールであるといえるでしょう。

小橋ら鉄道技術研究所からの報告

小橋ら⁴⁾は7種類の侵食防止剤（表-2）について（1）噴射水による洗掘抵抗実験といった予備実験を経て降雨実験装置による侵食実験、（2）蒸発抑制効果・薬剤の浸透深さ、（3）薬害について、（4）凍上防止効果の実験を行い、これらの結果を基に盛土斜面にて現地試験を行っています。使用した侵食防止剤の区分は、山寺の区分と異なる区分としています。合成ゴムラテックス、アクリル系エマルジョン（ルナゾールAH）、アスファルト乳剤系、酢酸ビニール系（エスフィックス1号）は被膜性、アクリル酸エステル（ドハロン）、ウレタン系は浸透性としています。

降雨実験装置による侵食実験ではアスファルト乳剤およびウレタン系のものがよいとしています。一方で現場試験結果では、合成ゴムラテックスを除きほぼ変わらないとしています。

蒸発抑制や薬剤浸透の関係からみるとアスファルト乳剤は浸透しませんが、蒸発抑制効果が高いという結果です。一方、浸透性の侵食防止剤は種類や濃度によって浸透厚は異なるが浸透します。一方、蒸発抑制効果が低いということは、山寺の分類のように土粒子の接触部のみを連結するため土壌間隙が残りの部分から水分が蒸発するということだと思います。当然のことながら、透水性のない薄い膜を作るアスファルト乳剤は、降雨による土壌の浸透も阻害します。のり面の土壌水分の補給は、地山よりしみてくる水分と共に降雨からの供給を期待しています。そういったトレードオフの関係にあることを注意しなければなりません。

侵食防止剤の種子への発芽・生育障害については、すでにすべての薬害試験を終えているとの理由で、ウレタン系のみについて示しています。そして薬剤が種皮に固結し、吸水・呼吸不良による物理障害はあるがこれは他の侵食防止剤一般に見られる現象で、実用上問題にならないとしています。なお、現場試験の結果ではアスファルト乳剤についてかなりの発芽障害が見られたとしています、「実験の使用量が通常の2倍であったことから起こった」と推察しています。

凍上防止効果は、土壌間隙を保持するように土壌を固める

表-2 使用した薬剤の性質および商品名⁴⁾

薬剤一般名	商 品 名 (製造会社名)	一般的使用法	備 考
酢酸ビニール系 エマルジョン	エスフィックス1号 (積水化学)	2液式。被膜性。10～30倍液を 1～2ℓ/m ² 散布	2液を混合することにより、エマルジョンを不安定にし、凝集しやすくしてある。
合成ゴムラテックス	マルタートA (三井東圧)	1液式。被膜性。3～10倍液を 1～2ℓ/m ² 散布	粘着剤を加え、被膜性を高くしてある。
アクリル系 エマルジョン	ルナゾールAH (ヘキスト合成)	1液式。被膜性。5～20倍液を 1～2ℓ/m ² 散布	同 上
アクリル酸エステル エマルジョン	ドハロン (東亜合成)	2液式（助剤散布後本液を散布する）ただし植生工用としては1液式。5～20倍液を1.5ℓ/m ² 散布	助剤によりゲル化させる。
ウレタン系 水性樹脂	ハイセルOH (東邦化学)	2液式（1液式でもよい） 10～20倍液を1～2ℓ/m ² 散布する	地表面の水、稀軟水と反応して、ゲル体を形成する。
カチオン系アスファルト乳剤 (土壌混合用)	CME-3 (日露化学)	1液式。被膜性 2倍液を1～2ℓ/m ² 散布する	土粒子と接触し分解する。 アスファルト乳剤の分解速度を遅くしてある。
カチオン系アスファルト乳剤 (浸透用)	OPE-1 (日露化学)	同 上	土粒子と接触し分解する。 乳剤の分解速度が早い。

浸透性の侵食防止剤の方が、表面のみを固める被膜型のアスファルト乳剤よりも凍上深が浅いと報告しています。また、土壌を砂とした場合の凍上深についてまとめられており、これらのことを考えれば、凍上深は土壌間隙の空気層多少が影響を及ぼしていると考えられます。しかし、まとめでは、化学薬剤では完全な越冬性が得られるものはないと述べています。理由として「高寒冷地では凍上現象は単に地表面のみの霜柱によるものではなく、かなりの深さでレンズ状に氷が発達する。加えて地表面の異常な乾燥やこれに伴う地表収縮、積雪・融雪による侵食現象など複雑な現象が考えられ、こうした現象への効果は考えられない。」としています。

小橋の試験でも侵食防止剤の土壌の侵食防止効果が高いものは、侵食のみを考えれば被膜性（型）のアスファルト乳剤、植生への障害、土壌への降雨浸透、凍結凍上への効果などを考えると酢酸ビニール（山寺は浸透・連結型と分類）などの方がよいといえるでしょう。

山本ら日本道路公団試験所からの報告

日本道路公団試験所報告にて杉浦らは1970年¹³⁾に、山本が1972年¹⁹⁾、1974年²⁰⁾にシラス、マサ土、ローム土について侵食防止剤の比較試験結果を報告しています。これらの成果をまとめたものは、学会誌の前身誌である緑化工技術²²⁾にもまとめられています。また、一連の植生のり面の侵食に関する試験にて植生単独また、侵食防止材と併用した侵食試験も1971年¹⁸⁾、1973年²⁰⁾に実施していますので興味のある方はこちらをご覧ください。この試験で実施したのは降雨強度500mm/h、30分というなかなか想像できない降雨強度にて実施しています。ここでも山寺のように薬剤を区分していますが、山寺¹⁷⁾が「被膜」としたものを「被覆」と異なる用語を用いています。また同じ製品でありながら異なる区分となっているものもあるので厳密に区分するのは困難なのだと思います。小橋⁴⁾も「酢酸ビニール系とかアクリル系とかいろいろな系列はあるが、同系列のものでも耐水性の性質は千差万別で系統的に性質を整理することは困難である。」と述べていますからそのようなものなのでしょう。

1970年¹⁴⁾の試験はシラス土壌にて6種類の薬剤を使用し、

侵食防止効果が高いものは、アスファルト乳剤、ついで酢酸ビニール、ゴム系のものは温度と土壤水分によって固結時間が大きく変動することが欠点としています。

1974年²⁾ではマサ土、ロームについて試験を行い、アスファルト乳剤、酢酸ビニール系などについて行い、浸透・連結型の場合は、土壤水分によって効果が変わることが示されています。植生工との併用した結果では、アスファルト乳剤は植生の成長が極めて悪いと報告しています。

3 グループの報告から

これら、山寺、小橋、山本らの成果で共通するのは、浸透せず表面に侵食防止剤自体の被膜を造るアスファルト乳剤のような資材の侵食防止効果が高いということです。侵食防止には侵食されない強度を持つ素材で地表面を覆えばいいということになります。一方、アスファルト乳剤はこの層を突き破り発芽してこない（新田は文献 p.159 中で 0.275mm 程度と計算）ことから、散布量が多いと植生が発生しないという結果をもたらします。さらに、撥水することで表面流が生じ、薄いもしくは散布されていない箇所を侵食し、リルやガリが発生しやすくなるという問題も抱えています。この侵食防止機能だけを突き詰めればモルタル吹付のように表面を硬く覆ってしまうことが一番ということになってしまいます。

酢酸ビニール系などの侵食防止剤（写真-1）は、植生の生育と侵食防止のための資材として改善したものであり、土壤にある程度浸透し、土壤間隙を保持するものです。倉田⁹⁾は、「草の種子の幼い芽が、エスフィックスの、薄い弾力があり、空気は通すが水は通さない丈夫な膜を破ってでてくることで、これは一種の神秘的な感じさを与える。」と記述しています。見たときの感動が文字を通して伝わってきます。3グループとも酢酸ビニール系でも土壤水分や土壤間隙によって浸透量、効果を発揮するまでの期間が異なるという指摘もしています。土壤水分が少なければ早く乾燥しますし、土壤水分が多ければ時間が掛かります。散布直後に降雨にあたれば、その量が多ければ固まらず流亡する可能性もあるため、効果は発揮できません。土壤間隙が大きければ深くまで浸透します。つまり土壤条件によって適する侵食防止剤は異なることも推測されます。

しかし現在ではそういった配慮は行われないまま使用されていると思います。ただ、現在、侵食防止剤だけを播種した斜面に養生剤として散布することはほとんどありません。種子散布工として、物理的な侵食防止材として活用されているファイバー（多くの場合は古紙粉砕物やパルプ原料となる木質繊維）などと併用して使用されます。この方法でも「侵食防止剤の保持期間は1~2ヶ月と導入した植物が発芽・生育するまでを想定したものである²⁾。」とされています。

1966年に山寺が初めて報告した飛砂防止として侵食防止剤を使用する方法¹⁴⁾も、現在でも同様の目的で行われています^{7,8)}。

まだ解決していない課題

侵食防止剤は、植物が発生するまでの期間に侵食を防止することを目的に使用されていますが、施工時期が晩秋~冬期



写真-1 代表的な酢酸ビニール系の侵食防止剤（液体タイプ）

の場合、植生が発生する前に積雪や凍結・凍上によって効果がなくなることが指摘されています。

倉田⁹⁾は、「どの養生剤でも、施工地に散布する方式をとる限り、十分な侵食防止効果を持続する期間は、3~4ヶ月くらいである。この持続期間は、散布量を多少増量しても変わらないようである。したがって、養生剤の効果は施工初期の種子が発芽し植物被覆が形成され、侵食防止の効果が発揮されるまでの、一時的なものであると考えた方がよい。」としています。

神辺ら²⁾では、東北地方での植生工の比較試験を行い、新田が開発したたね吹付工の養生剤として、アスファルト乳剤やドロゲン（1972年山本の報告によれば揖斐電化成：高分子合成樹脂および腐植酸よりなる資材）を散布した試験を実施しています。この結果では、「アスファルト乳剤あるいは化学薬剤を用いる工法は冬期凍上に対しては完全に無力である。」とし、「たね吹付工は、東北地方の場合、9月はじめまでには施工を終えるべきである。」としています。この試験でのたね吹付工は、粘質土壌や種子、肥料、水を混合し10mm程度、斜面に圧密し、その上に養生剤としてアスファルト乳剤あるいは化学薬剤を散布する方法です。養生剤として使用した侵食防止剤は被膜および浸透・連結型は、冬期間の侵食防止にはいずれも効果が無いと報告しています。

現在でも、侵食防止剤の養生剤利用にて寒冷地で凍結・凍上に耐える商品はありません。このような環境は、侵食防止剤を粘着材として活用し、基盤厚を確保する植生基材吹付工などの対策を行うか、表面を保護するキリワラ、ワラムシロなど地表面を保護する対策を実施することで対応しています。この地表面を保護する方法は、1970年代以前に行われていた緑化と表面侵食防止の研究の、2つめ研究にて整理されています。2つめの研究とは、森林内のリター等の堆積物によって被覆物を設置し侵食量の関係を整理した試験のことです。積雪寒冷地の秋~冬期に施工する場合は、侵食防止剤の養生剤としての散布という土壤自体を固める薄い地表面の改良ではなく、表面を全面的に覆うようなシート、マットなどが課題解決の方向となったということでしょう。画期的な資材が開発されれば、これもくつがえるかもしれません。

山寺¹⁷⁾は、「ドライ散布できる粉体の侵食防止剤（写真-2）の開発もされているが、侵食防止力が弱いものが多い。」とさ



写真-2 代表的な酢酸ビニール系の侵食防止剤(粒状タイプ)

れていますが、この点はほぼ解決されているようです。ただし、これらは一度一定の水分を吸った上で広がり、乾かないと効果を発揮しません。単純に斜面に侵食防止剤を養生剤として散布する状態では、侵食防止剤としての効果を発揮できません。斜面・のり面緑化は、斜面という重力が掛かる環境下で、植物が生育できる適度な土壌間隙を持つ(土壌硬度)基盤と種子と肥料などの養分を保持させることが求められます。それを保持させるための侵食防止剤が斜面を転がり落ちては何もなりません。物質の形状と反応の特性を理解した上で斜面にて使用することが必要です。最近は運搬重量が制限されるドローンを使用した緑化¹⁰⁾を検討しているため、斜面にて止まる資材の重要性を改めて認識したところです。

まとめ

今回の報告にて引用した論文で実験に活用されていた侵食防止剤のほとんど酢酸ビニール系などの浸透・連結型です。わかりやすくいえば、木工用ボンドのようなものです。臭いも形状もそっくりです。私が知る 30 年間でアスファルト乳剤を使用した事例を知りません。そして報告で使用された薬剤もすでに廃番となったり、入手できなくなったりしているものも多いのが現状です。酢酸ビニール系の元祖ともいえるエスフィックス 1 号は、我々が最近まで使用していたものとは異なる品番のようですし、そのエスフィックスも数年前に入手不可能となっています。市場に流通している土木資材の価格をまとめた建設物価¹⁾の養生剤のカテゴリーに記載されている侵食防止剤と思われるものは 25 品目あります。一方、これに記載されていない侵食防止剤も多数あります。これが同じような効果を発揮するとは思えません。使用する立場からすれば、統一した試験方法などから、侵食防止に関する能力を表示してもらいたいものです。

ここまでくると、侵食防止剤の粘着剤としての利用を記述したくなります。これは、厚層基材吹付工法の開発の歴史とも重なり、一家言ある方がいらっしゃるの筆が重いです。次回は、斜面上にシートやマットを設置して侵食を防止する方法について記述を予定しています。

参考資料

- 1) (一財)建設物価調査会 (2025) 建設物価, 2025・7 月号 pp.431.
- 2) (社)日本道路協会(2009)道路土工一切土工・斜面安定工

指針(平成 21 年版), 社団法人日本道路協会, pp. 214-215.

- 3) 神辺浩三・小橋澄治・今井篤雄(1966) 東北地方での植生工比較試験, 鉄道技術研究報告, 531: 1-24.
- 4) 小橋澄治・坂崎和夫・黒沢 章・草野国重(1974) 斜面の雨水浸食防止の研究, 鉄道技術研究報告, 886: 1-75.
- 5) 小橋澄治・黒沢 章・秦野武雄・草野国重(1971) 最近の浸食防止剤について, 新砂防, 23 (4): 1-5.
- 6) 倉田益二郎(1979) 緑化工技術, 森北出版, 298pp.
- 7) 国土交通省.(更新:2023 年 12 月 19 日) “NETIS KT-210027-A, のり面浸食防止工法「ガリガード(あと散布方式)」”, <https://www.netis.mlit.go.jp/netis/> (参照: 2025 年 7 月 31 日).
- 8) 国土交通省.(更新: 2024 年 6 月 6 日) “NETIS KK-200056-A, 粉じん・侵食防止剤「ストーンウォール」”. <https://www.netis.mlit.go.jp/netis/> (参照: 2025 年 7 月 31 日).
- 9) 国立国会図書館, “国立国会図書館デジタルコレクション”, <https://dl.ndl.go.jp> (参照: 2025 年 7 月 31 日).
- 10) 中村彰宏・田中 淳・植山雅仁・中桐貴生・熊田勇斗・木村元由輝・山田隆信(2025) ドローン緑化のための山地崩壊斜面での散布体からの発芽と初期生残への土壌水分の影響, 日本緑化工学会誌, 50(4): 319-326.
- 11) 新田伸三(1959) 斜面吹付播種方法, 特許番号 259781.
- 12) 新田伸三(1968) 土木工事ののり面保護工, 新田伸三・小橋澄治 著, 鹿島研究所出版会, 157-159.
- 13) 杉浦 力・足立克久・山辺正司(1970) 浸食防止剤(材)比較試験, 日本道路公団試験所報告 S44, 143-148.
- 14) 山寺喜成(1966) 緑化工における土壌侵食防止に関する研究(1) 飛砂防止剤について, 日本林学会大会講演集第 77 回(昭和 41 年), 560-562.
- 15) 山寺喜成(1967) 緑化工における土壌侵食防止に関する研究(II): 土壌侵食防止剤の降雨侵食防止効果, 日本林学会大会講演集第 78 回(昭和 42 年), 328-330.
- 16) 山寺喜成(1969) 緑化工における土壌侵食防止に関する研究(III): ポリ酢酸ビニールによる降雨侵食防止の改善, 日本林学会大会講演集第 80 回(昭和 44 年), 332-334.
- 17) 山寺喜成(1986) 緑化工の基礎的諸問題(1), 砂防学会誌, 39 (2): 36-41.
- 18) 山本正之(1971) 植生のり面の侵食に関する試験, 日本道路公団試験所報告 S45, 91-103.
- 19) 山本正之(1972) 植生のり面の侵食に関する試験, 日本道路公団試験所報告 S46, 195-204.
- 20) 山本正之(1973) 植生のり面の侵食に関する試験, 日本道路公団試験所報告 S47 206-225.
- 21) 山本正之(1974) 植生のり面の侵食に関する試験, 日本道路公団試験所報告 S48, 198-215.
- 22) 山本正之(1974) 植生のり面の侵食に関する試験, 緑化工技術, 2 (1): 26-33.

緑地探訪 新名神高速道路 甲南トンネル西側坑口（滋賀県甲賀市）

小宅由似

香川大学創造工学部 (oyake.yui@kagawa-u.ac.jp)

2025年7月某日、草津JCTから新名神高速道路に進入した。京都での所用がてら、約10年ぶりにかつての調査対象地を一目見てやろうという魂胆であった。

高速道路の造成に伴い生じる法面は表土安定を主目的として緑化されたものが多いが、その緑化工法は年代によって異なる。1990年ごろ以降に造成された法面では、盛土法面は植栽工による樹林化が、切土法面は播種工による草地管理が行われるケースが多い。1993年から造成が開始された新名神高速道路もその例に漏れない。しかし、甲南トンネル坑口のこの切土法面は少し事情が違い、上り線の工事区間には三上・田上・信楽県立自然公園の第三種特別地域が含まれる。そのため、緑化に際しては周辺の既存植生の生物多様性に配慮する必要があった。一方で、当該法面は勾配1:1.3~0.8（傾斜38~52°）の急勾配で、しかも表層が花崗岩質と、表層崩壊のリスクが高い。そこで、既存林のササ類を主体とする下層植生をマット状に切り取り法面に固定する「表土マット移植工法」が開発され、2002年に実施された³⁾。

私は縁あって、この坑口法面の成立植生を2015年の夏に調査した¹⁾。当時、本線から望む法面は植物で十分被覆されているものの、まだ森林には見えない状態だった。立ち入ってみるとアカマツが優占しており、リョウブやソヨゴなどの樹種が多くみられる初期の森林の様相であった。足元は根系ごと切り出されて導入されたミヤコザサが繁茂していたが、土壌はまだまだ薄く、花崗岩質の砂や礫がザラザラと崩れていくような状態であった。しかし崩壊している様子は見受けられず、ミヤコザサの根系の土壌緊縛力の高さを思い知った。樹高は最大で5m弱と施工13年後にしては樹高成長が遅く、

切土法面であるがゆえの土壌の保肥性と保水性の低さが伺い知れた。

さて、草津JCTから10分ほど走ったところで甲南トンネルの坑口が見えてくる。単独運転中だったため写真等がないのが残念だが、明確に緑量が増加していた。外観からはまだアカマツ優占群落のように見受けられ、群落高は目測で8mほどだろうか。植生遷移は順調に進行しているようであった。生物多様性保全に向けた緑化法面では、森林の成立過程の追跡には10年ごとを目安にモニタリングを行うことが望ましいと指摘されている²⁾。当該法面も私が以前調査してから約10年が経過している。もう一度、この法面の植生を調査できる縁があることを願うばかりである。

ところで、この坑口法面を本線から一目見たい場合、もしくは近く的一般道から現場の雰囲気を感じたい場合は、ETCの用意を推奨する。なぜならETCカードを忘れてしまった私は、トンネル最寄りの信楽インターチェンジがETC専用だったため利用できず、その先の甲南インターチェンジまで約11kmも余計に走る羽目になってしまったからだ。

引用文献

- 1) 小宅由似・今西純一・堀田佳那・東 若菜・田中伸一・石原一哉・柴田昌三 (2016) 施工13年後の植生回復状況からみた表土マット移植工法の評価, 日本緑化工学会誌, 42(1): 15-20.
- 2) 日本緑化工学会 (2002) 生物多様性保全のための緑化植物の取り扱い方に関する提言, 日本緑化工学会誌, 29(4): 481-491.
- 3) 梁川俊晃・柴田昌三・上村恵也・徳永正夫・衣笠斗基子 (2003) 表土マット移植工法を用いた法面緑化に関する調査研究, 日本緑化工学会誌, 29(1): 265-268.



写真左: 施工3年後の坑口法面の様子 (柴田昌三 現淡路景観園芸学校校長より提供)

写真中央: 2015年度調査時点での坑口法面の様子 (小宅撮影)

写真右: 2015年度調査の様子 (小宅撮影, 調査者は今西純一 現京都大学教授)

緑地探訪 種崎の海岸マツ林 (高知県高知市)

楠瀬雄三

エコシステムリサーチ (marukusu5@hotmail.com)

日本の海岸には飛砂防止や防潮を目的に植えられたマツ林が多く見られる。これらが本格的に植林されたのは江戸時代になってからのようで、それは江戸時代に入り農業政策の重視や農業技術の向上によって人口が増大し、燃料として山の木々を多く刈った結果、大規模な表土の流亡を招き、海に達した土砂が砂浜へ打ち寄せられて砂浜を増大させ、甚大な飛砂害をもたらしたことによる。飛砂の害が問題になるということは、陸側には守るべき人の生活圏があるということであり、たとえ飛砂があったとしても、陸側に守るべきものがなければマツ林は整備されない。つまり、マツ林の海側には飛砂の供給源たる砂浜があり、陸側には守るべき田畑や居住地などの集落がある、ということである。この砂浜、マツ林、集落の3つはセットとなって日本の海岸景観を構成する要素となっている。私たちは、この複数の環境を含む海岸景観が形成されることによる生物多様性との関係について研究している。その対象地の1つが種崎の海岸マツ林である¹⁾。

種崎の海岸マツ林は浦戸湾の河口の東側に位置し、対岸には景勝地として有名な桂浜がある。このマツ林の面積は約8.0 haであり、中央付近を通る道路によって分断され、主に東側は県立の自然公園(種崎千松公園)として県が管理し、西側は墓地として地元の墓地組合が管理している。高知市とその周辺には種崎以外にも海岸マツ林はあるが、種崎の海岸マツ林は他と比べて面積が大きい。それが研究対象地として選んだ理由の1つである。その他に、種崎の海岸マツ林の特徴として以下の2つが挙げられるだろう。1つはマツ林を構成するマツの大きさである。1970年代にマツ枯れの被害が蔓延しはじめたころ、種崎の海岸マツ林も多くのマツが罹患し

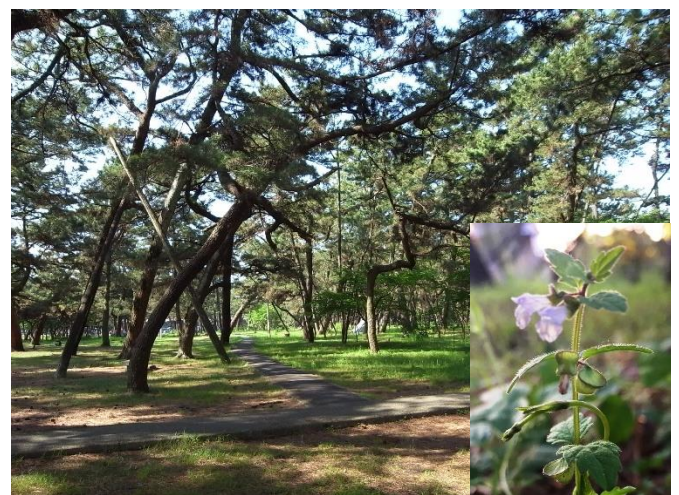
たが、薬剤の散布、罹患木の伐採などの保護策が積極的にとられ、多くのマツが守られた。そのため、今でも樹高20 m以上で胸高直径60 cm以上の大きなマツが多く残されている。このため、種崎の海岸マツ林は県下の他の海岸マツ林と比較して、より大きなマツで構成されている。

もう1つはマツ林の生物多様性の高さである。例えば鳥類については、県下の海岸マツ林では夏季よりも冬季において種数や個体数が多くなる傾向にあり、それは種崎の海岸マツ林でも同様だが、他の海岸マツ林よりも種数や個体数が多い(楠瀬・福井 未発表)。特に冬鳥のビンズイの個体数が多いのが特徴である。当地のビンズイは人馴れしているため、間近で観察することができる。また、植物については、林床にコナミキやウマノスズクサなどが生育し、樹上にはキバナセッコクやヨウラクランなどが着生しているなど、少なくない数の絶滅危惧植物の生育地となっている。種崎の海岸マツ林では毎年5月に下草刈りが行われており、林内に適度に開けた環境になっている。このことが絶滅危惧植物の生育地として機能する要因の1つになっているのかもしれない。

今後も他の海岸マツ林を調べ比較することで種崎の海岸マツ林の生物多様性を明らかにしていきたいと思う。

引用文献

- 1) 楠瀬雄三・福井 亘 (2023) 高知市種崎における海岸クロマツ林とその周辺の鳥類群集, 日本緑化工学会誌, 49(1): 115-118.



写真左：種崎の海岸マツ林を上空から望む。写真中：林内の様子。写真右下：林床に咲くコナミキ。



路傍の草を緑化工へ

熊田勇斗 kumata@rontai.co.jp

ロンタイ株式会社

1. はじめに

今回『新 会員の自慢』を担当させていただくことになりました。ロンタイ株式会社製品開発課所属の熊田です。

前号で執筆された小澤信彦様、編集委員長の岡浩平先生よりご依頼をいただき、実績のない私が執筆して良いものかと逡巡しましたが、せっかくこのような機会を頂戴しましたので僣越ながらお引き受けいたしました。前々号の中村剛様、前号の小澤信彦様にならって、皆様が気軽に読みやすい文章を意識して執筆いたします。

2. 自己紹介

ほとんどの会員の皆様と初めましてになるかと思います。このコラムの趣旨が会員の紹介でもあるとのことですので自己紹介からさせて頂こうと思います。

私は大阪南部にある泉佐野市というところに生まれました。大阪にありながら漁業と水ナス、キャベツ、玉ねぎなどの農業が盛んな地域で、沿岸部には西日本における世界の玄関口である関西国際空港があります。海と山が近く、幼いころから自然と関わりながら過ごしました。大阪生まれではありませんが、子供のころは田んぼのオタマジャクシを捕まえたり、用水路でザリガニを釣ったり、川でカメやカニを捕まえたりと、都会の喧騒とはほど遠い自然豊かな環境で育ちました。高校はだんじり祭りで有名な岸和田市の高校へ進学しました。実は岸和田市以外にもだんじりはあり、私も幼少期からだんじり曳行に参加していました。今は見物する側になってしまいましたが、太鼓の音を聞くと今でも心が躍ります。すごい迫力ですので是非一度見て頂きたいです。

高校卒業後は信州大学農学部森林科学科へと進学しました。この頃は漠然と自然と関わりながら学びたい、出来るだけ現場の近くで学びたいと考えており、演習林が近く実習が多くある信州大学を選択した記憶があります。

大学では森林生態学研究室に所属し、ヒノキの成長に関する研究をしていました。大学生の頃は緑化というよりは山全体に興味があり、授業や研究を通じて多くの学びを得ました。植物に関わる仕事がしたい、自分が学んできたことを仕事にも活かしたいと思い、卒業後 2013 年にロンタイ株式会社へ入社し、営業として広島支店、仙台支店、関東支店と渡り歩き、2021 年より現在の製品開発課に所属しております。

現場へと出て汗をかくことをモットーとしており、植生調査などの現地調査はもちろん、冒頭の写真のように自社製品



の施工を自分で行うこともあります。

3. ロンタイについて

私が勤務するロンタイ株式会社は 1957 年に鉄工業会社として設立され、1963 年より現在の事業である緑化資材製品の製造・開発に着手しました。1969 年には社名にもなっているロンタイ（人工筋芝）を発売し、その後多種多様な植生シート、マットを開発しております。人や社会の安全と自然環境保護の両立を目指し、法面緑化製品を専門に製造販売しております。また前身が鉄工業という事もあり、自社製品の製造機械は自社にて設計製造している珍しい会社です。製品製造のみに留まらず、法面工事も請け負っており、私自身も営業時代には現場での施工や施工管理を経験しました。

近年は、地域性種苗や国内産種子を活用したネイチャーボジティブに貢献できる緑化工法に力を入れております。国内産種子については数種ではありますが在庫もありますので、詳しくは弊社ホームページ²⁾を見て頂ければと思います。

4. 日本緑化工学会との関わり

当学会へは現在の製品開発課に所属して以降、大会への参加等を通じて関わるようになりました。学部卒で大学院に進学しなかった私は学術的な場自体がほぼ初めての経験であり、新鮮な気持ちで初めて大会へ参加したことをよく覚えています。その後、生態・環境緑化研究部会が主導されている阿蘇小規模崩壊地復元プロジェクト¹⁾へは 2022 年度より種子採取と活用の部分で参加させて頂き（写真-1）、現在も小規模崩



写真-1 阿蘇にてススキを採種する様子



写真-2 阿蘇地域にて地域性種苗を使用した植生マット



写真-4 葉っぱを指さす息子 関西万博にて



写真-3 施工後約 10 ヶ月 ヨモギとススキが繁茂

壊地の復元と地域性種苗の活用（写真-2, 3），阿蘇の草原保全や地域の方々の産業振興等を目指して関わらせて頂いております。

また、斜面緑化研究部会第 18 期幹事として部会の活動にも参画しております。

技術職に異動してから早くも 4 年が経ちました。まだ当学会誌への投稿経験はありませんが、現在取り組んでいる案件をまとめて技術報告として発表し、緑化工技術および日本緑化工学会の発展に貢献したいと考えています。

5. 最近の興味 路傍の草

私にはもうすぐ 2 歳になる息子がいます。最近家の近くを散歩したり、公園で遊んだりするのですが、植物を見つけると「はっぱ！」と元気に教えてくれます。おそらく私が植物をよく見ているせいなのですが、徐々に葉の違いが分かってきたのか「これは？これは？」と植物の名前を聞いてくれます。これまで何気なく「タンポポだねー」とか「猫じゃらしだねー」と応えていたのですが、毎回聞かれるたびに、これは何タンポポなのだろうか、そもそも日本には何種類のタンポポがあるのだろうか、エノコログサは穂が出ていなくても見分けることが出来るのだろうか、など色んな疑問が湧いて

きました。特に草本植物の見分け方は奥が深く、日々新たな発見があり興味は尽きません。

近年は生物多様性保全やネイチャーポジティブに関する話題が多くなり、これまで注目されていなかった「その辺の雑草」が注目されているように感じています。生物多様性保全に配慮した緑化工法としては大きく分けると「表土利用工」「自然侵入促進工」「地域性種苗利用工」となりますが、特に「地域性種苗利用工」は採種やその後の品質管理に課題があり、採用される機会が少ないように思います。私自身がもっと知識を身に付け、身近な植物を利用できるような技術を作っていきたいと思います。

少し真面目な話になりましたが、忙しくなると考え事ばかりで路傍の草に目を向ける余裕はなかなか持てないものです。時には心にゆとりをもち、のんびりと散歩しながら草花に目を向ける時間も大切にしたいと思います。

6. おわりに

このような内容で良いものか不安を感じていますが、このコラムを通じて私の人となり伝われば幸いです。

今回の執筆は自分自身を振り返る良い機会となりました。思い返せば、幼少のころから自然を愛し、それが今の自分に繋がっていることを再認識できました。これからも法面緑化資材専門メーカーの一員として知識と経験を深め、より広い緑化の知識を付けていきたいと考えています。会員の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

また、法面緑化や植生マットについてお手伝いできることがありましたら、是非お気軽にお声かけ下さい。

参考資料

- 1) 日本緑化工学会. “熊本・阿蘇地域における活動” 日本緑化工学会ホームページ.
https://www.jsrt.jp/tech/ASO_project.html (参照: 2025 年 7 月 4 日).
- 2) ロンタイホームページ. <https://www.rontai.co.jp/>



バブル世代のキャリアチェンジ夢囃

平林 聡^{1,2,3)} satoshi.hirabayashi@davey.com

- 1) The Davey Tree Expert Company
- 2) United States Forest Service
- 3) 千葉大学園芸学部



1. はじめに

編集委員長から頂いた執筆依頼は「新・会員の自慢というタイトルですが、会員紹介のページ、という解釈で、そして気楽な（ゆるい）イメージで執筆して下さい」ということでした。ですので、論文等では有り得ないゆるゆるの口語調で書かせてもらいます。諸説ある内容や個人の意見を多分に含みますが、エビデンスの提示等は行っておりません。また、タイトルや本文中にパクリと思しき表現があるかも知れませんが、インスパイアおよびオマージュということでお許し下さい。

書こうとしていることは、凡庸な人間が人生の様々な局面で多くの人に助けられ、ラッキーも重なり、うまく滑りこんだ、絶望しても隣には希望があった、食っていくために必死にあがいた、そしてその先に新しいキャリアが開けた、という話です。これまでの半生を振り返りながら、その時々々の心の内や本音をさらけ出すことで、日本緑化工学会の若い（若くなくても）会員の方たった一人でも良いので、自分のキャリアに疑問を持っているとか、将来、何をやりたいのか分からない、やりたいことはあるけど、そこへの一歩を踏み出せない、というような方の背中を押すための一助とでもなれば良いなあ、と思って書きます。

2. 滑り込みの人生

武蔵工業大学（現東京都市大学）の電子通信工学科を卒業し、米系の半導体・通信機メーカーであるモトローラ社に入社したのは1992年のことでした。翌年からは職場に全く後輩が入社してこなくなり、目の前で日本のバブル経済は崩壊しました。ギリでバブル期に滑り込んだところから私の社会人生活は始まりました。後になって就職氷河期の方々からは、やれ「バブルだから」だの「バブルのくせに」だのと揶揄されることも多々ありましたが、とにかく滑り込みました。

日本での11年間の社会人生活の後、2003年に脱サラして State University of New York College of Environmental Science and Forestry (SUNY-ESF)の大学院に滑り込みました。運よく棒だか箸だかに引っかかった、という感じもあります。アメリカの大学院10校に願書を送り2勝7敗と大きく負け越しました。残りの1校はYale大学環境スクールのウェイティングリストに残っ

たことで1分けとでも言いたいところですが、相撲で言えば行司の軍配に物言いがついてビデオ判定の末、軍配通り負け、といったところで10日目に負け越しでした。でも1勝だけでも大学院に入学はできたので、番付を落とすことにもならなかった、とも言えます。

後でも述べますが在学中にキャンパス内にある US Forest Service (FS) にリサーチアシスタント (RA) として雇用されたのも、降って湧いた様な話で、滑り込んだというか、転がり込んだ、といったところでした。

2017年にアメリカでの永住権（グリーンカード）を取得したのですが、申請はその前年の2016年に済ませていました。その年に大統領選があり「アメリカをもう一度グレートに」というあの方が大統領に選出されました。翌年からは外国籍の人間への風当たりが強くなったのは、今2025年と同じ状況です。うまく滑り込みました。

3. 絶望の隣は希望か

私が社会人生活の中で最大級に絶望したのは転職の失敗でした。モトローラの次には先に転職していた先輩の紹介でソニー株式会社に転職しました。問題はその後で、ITコンサルタントという肩書と高給に目がくらんで、アクセンチュア株式会社なる米系のITコンサル企業に転職したのです。それまでは無線機、ICカード、携帯電話等の組み込みソフトウェアのコードをひたすら書く仕事でしたが、アクセンチュアで求められたのは全く異なるスキルセットでした。「ロジカルシンキング」やら「クリティカルシンキング」なる手法を用いて、ひたすら思考し、その思考をパワーポイントで「絵」にする。お客さんの接待飲み会等を除けばこれが仕事の全てでした。描かれたパワーポイントは「紙」と呼ばれ、やれ「紙でできたか？」とか「紙直し入れたか？」などという言葉が飛び交い、「絵にできない思考は、思考ではない」という正しい様な正しくない様な言葉を浴びせられ続けました。労働基準法を無視した労働時間と「お前の時給は銀座の飲食業の女性より高いんだから、それに見合った仕事をしろ」というプレッシャーの中での紙描きを強いられる毎日でした。当時は「ブラック企業」や「パワハラ」という言葉はありませんでした。

携帯電話の研究・開発のバックグラウンドを買われてITコンサル企業にマネージャーとして華々しく転職したつもりが、全くの畑違い、業界用語違いでした。仕事が終

わって夜中に会社ご用達のタクシーで小一時間の帰途につくわけですが、運転手さんが用意してくれているビール1缶と柿ピー2袋だけが隣にある希望でした。

それでもなんとか食らいつくしかなく、疲弊した週末や通勤中にもコンサル系のノウハウ本や企業戦略本を読み続け、必死に勉強しました。全然面白くなかったです。分かり易く人生の挫折、絶望でした。人は追い込まれると開き直るしかないのか、「この歳になってどの道、睡眠時間も精神も削って必死に勉強し直さなきゃならないんだったら、本当にやりたいことをやってやれ」と思うようになり絶望の隣に淡い希望が湧き出てきました。

SUNY-ESF からの合格通知には Teaching Assistant (TA) の採用通知も同封され、授業料は全額免除、さらに少ないながらも給与を得られる、という条件でした。希望が湧きました。しかし、絶望の隣に希望があるということは、希望から見たら隣に絶望があるということです。渡米を控える私に1通のEメールが届きました。私を留学生として受け入れてくれるはずの教授が大学キャンパス内の駐車場で倒れ帰らぬ人となった、というのです。留学は白紙撤回になるのでしょうか、絶望です。しかし、隣のオフィスの Dr. Chuck Kroll が「うろたえるな、俺が面倒みてやる」とEメールをくれました。またも希望が隣にありました。

4. 再チャレンジ不可能な社会

日本の学生時代に、あるニュース番組でゴミ問題を取り上げているのを見て「そこは何かしなきゃだよな」とぼんやりと考えていました。ITC技術によりエンターテインメントや文化の発展に貢献することも、生活を便利にする新たな技術やサービスを提供することも、社会にとって価値のあることなのですが、私はそこでの仕事は、大量消費社会に寄与する側面があると感じていました。俺はゴミを増やしている側にいる、と。キャリアをリセットするならもっと直接的に社会貢献したり、地球環境を守ったりする、そんな仕事に就きたい、と強く思うようになりました。

仕事を辞め退路を断ち、IT系から環境系のエンジニアへとキャリアチェンジしようと、私は人生の崖っぷちに立ちました。2002年のことです。当時の日本には異なる分野にスムーズに転身できる仕組みは恐らくありませんでした。「再チャレンジ不可能な社会」です。そこで元々海外志向が強く、日本を飛び出したい願望も強かったので、「アメリカに留学してキャリアチェンジしてやれ」と思うようになりました。今は「再チャレンジ可能な社会」「人への投資やリスクテイク」といった言葉が政治の世界で聞かれる様になり、日本の社会も変わったのでしょうか。

キャリアチェンジするにあたってまずやったのは、皮肉にも「絵」を描くことでした。自分の社会人としてのバックグラウンドを整理し、どんな授業を受ければそれを活かせるのか、これからのキャリアに繋げるにはどんなスキルを身に着けるべきか、そして将来的にどんな職種や就職先を目指せるのか、そうしたことを思考して絵にしました。IT系のバックグラウンドしかなかったのが、環境系エン

ジニア転身にはGISやリモートセンシング等のIT技術に近い分野に頼るしかありませんでした。そして、この紙を携えてアメリカ横断のキャンパスビジットツアーに出かけたのです。アドミッションオフィスや教授陣、さらには若い日本人留学生にまでとにかくプレゼンしまくりました。ITコンサルから無職へと転落する中で、どこかの棒か誰かの箸にでも引っかかってくれ、と。

当時、経済的に救ってもらったのは厚生労働省からの教育訓練給付金なる制度でした。これを受給して日本の予備校に通い、大学院留学の準備をしました。出願の結果は前出の通りでしたが、これで人生踏みとどまった、と2校からの合格通知をわなわなと震えながら読み返しました。

5. これで食っていくしかない

30代も半ばに差し掛かろうという歳で、脱サラして学生になったわけですから、悠長に学生生活を謳歌することなどできません。ここでコケたら人生また落ちこみます。授業は毎回、最前列の真ん中の席に陣取りました。今思えば、先生や他の学生から「こいつガツガツしてんなあ」と引かれていたかも知れませんが、そういう体裁とかを気にしなくて良いのが自由の国アメリカです(アメリカはグレートでした)。外資系企業で働き、海外長期出張等も経験して英語力は一応何とかかなるかと思って留学しましたが、いかんせん、年齢的に暗記はまるでダメでした。

こんな大チョンボも犯しました。TAで最初に担当したのはPower Systemsというクラスで、全く何のことか分かっていませんでした。最初のオフィスアワーで学部生ほぼ全員がTAに宿題について色々質問したいと集まって来ました。全く勉強したことない内容を教えられるはずもなく、答えを全部黒板に書き出して、皆それをノートに書き写しました。自由の国のなせる業です。このことは先生にも正直に話して、それ以降はTAとしての責任を果たすべく必死に勉強しました。最初は興味が無くとも、自分が目指す将来に繋がると思えるだけで、アクセンチュア時代とは全く異なる心持でした。

自分の履修科目が3つほど、TAが1つというのが典型的な1セメスターの授業数でした。これは仕事で例えれば4か月が納期のプロジェクトを一度に3、4個抱えている、というようなものでした。これは忙しいことは忙しいのですが、例えばコンピュータラボでのワークは、予めある程度用意された答えや結果にたどり付ける様にデザインされているので、実社会での問題解決に比べたらとても楽ちんでした。学生生活を送る中で、社会人の時代と比べて、自分の時間をほぼ全て自分の為だけに使える、というのはなんて贅沢なのでしょう、と感動したものです。感動といえば自然環境に恵まれた土地でしたので、バーディングクラブに属して学部生達に教えてもらいながら野鳥観察をすることで感動も得ることができました(写真-1)。人間どんなに追い込まれても休息は絶対に必要です。

アメリカの大学院には授業の履修が全て終わった時点で、Ph.D.の研究を本格的に始める資格を得るためのCandidacy Examなるものがあります。大学によってその

形態は様々でしょうが、私の場合は Ph.D. のコミティーメンバー4 人から出される筆記試験を 4 日間ぶっ続けて受け、それをパスした後に全員を集めての面接試験というものでした。この試験は 1 回の失敗は許され、2 回目のチャンスがあります。2 回目もパスできないと、Master の学位を授けられ大学からは退学させられてしまいます。Ph.D. 候補生になっても、その後 3 年間でその資格は失効するので、その間に学位を取得する必要があります。

Ph.D. 候補生になって、あとは Dissertation (博士論文) の研究、執筆を残すのみで大学院を去る、俗に ABD (All but Dissertation) と呼ばれる人達があります。アメリカ人はこれができます。学位が無くとも就職できれば人生としては問題ありません。ところが留学生はそうはいきません。学位を取らなければ滞在資格も得られないし、違法就労しかできません。その意味でも必死に取り組むしかありませんでした。それでも Candidacy Exam は 1 回目の面接でうまく返答できずにコケかけました。「Satoshi はまだ準備できていないのだろう」と、えらく難しい質問をしてきた Dr. Ted Endreny が温情をかけてくれて、面接は次のセメスターまで延期になりました。Ted は今では i-Tree 開発の良き同僚です。このころからは 20 年近い時間が経過しているにも関わらず、未だに、これから Dissertation を書かねばならず途方に暮れているという悪夢を定期的に見ます。

6. Dave Nowak, Urban Forestry との出会い

アカデミックアドバイザーの Chuck のグラントが終了し、私を RA として雇えなくなったと言われた 2007 年の夏休み前、大学院の同期生である Greg Bacon 君からキャンパス内の FS で RA として働かないか、と誘われました。彼は既に FS で何年かの勤務経験があり、私が元々はソフトウェアエンジニアだったという話を彼のボスである Dr. Dave Nowak にして、じゃあ連れてこい、ってことになっていました。

言われるがままに Greg と一緒に Dave に会いに行きました。採用面接です。履歴書も何も要求されず、「Hi, お前、ソフトウェア書けるのか?」「Hi, I'm Satoshi. Ah, yes」という程度の言葉を交わしたくらいで、数秒で終わった感じがします。採用決定です。その年の夏休みから RA として勤務し始め、現在に至っています。

Dave の最初の印象はマシンガンの様に話す人、でした。慣れるまでは話を聞き取るのに苦労しましたが、これが学位取得後のキャリアや人生にとっての最大の出会いでした。後で知ったことですが、この Dave はなかなかの人物でした。i-Tree とその前身である UFORE モデルを開発して世の中に広めた張本人で、アメリカはもとより世界の Urban Forestry の権威といったところかと思えます。

また、これは更に後になって知ったことですが、Urban Forestry の黎明期にこの新しいコンセプトについてアカデミアや実務者の間での共通認識を醸成するための The National Urban Forestry Conference を主導したのが SUNY-ESF とこの FS のオフィスだったのです¹⁴⁾。私が



写真-1 2024 年近所の公園で遭遇した Barred Owl

個人用に使っているオフィスの本棚にタイプライターで打ち込まれた、その会議録の冊子を見つけた時はお宝発見という気分でした。これを編集したのが、私の Ph.D. 学生時代のコミティーメンバーの一人、Dr. Lee Herrington だったことには更に驚きました。その時には退官されていて、現在は他界されているので Urban Forestry 黎明期の生の証言を聞くチャンスを逃したのが残念です。

7. 現在の生活

2005 年、2009 年にそれぞれ Master of Science, Ph.D. を取得し、学生生活は終わりました。そこからが本当にこの業界で食っていくための闘いです。とは言え、運よく FS に潜り込んでいた私は i-Tree 共同開発企業である The Davey Tree Expert Company と FS のジョイントポジションという形でずんわり雇われました。2012 年には日本工営 (株) の森岡千恵さんから問い合わせのメールを i-Tree のカスタマーサポートの部署に頂きました。日本からの問い合わせということで私が対応させて頂き、そこから日本の皆様との関係が始まりました。学位を取得したとは言え、その分野を英語でしか勉強していないので日本語の専門用語が理解できず、「こいつ大丈夫か?」と、皆さんには大変いぶかしがられたことと思います。

2016 年の学会誌大会特集号に i-Tree Eco による定量化を日本で初めて行った論文を発表し、京都での大会に参加しました。それ以降、日本の研究者、実務者とのコラボレーションで技術報告の発表や研究集会等に参加させてもらっています^{3-13,15)}。コラボレーションはアジア各国へと拡がり、Asian Urban Forest Network (AUFN)での活動に繋がりました²⁾。さらには、千葉大学の加藤顕先生のご尽力により客員准教授なる称号も頂きました。一介のサラリーマンだった頃から考えると夢のような話です。

私はアメリカのニューヨーク州に 2003 年から居住しています。日本の皆さんはニューヨークといえばそれは高層ビルが立ち並ぶニューヨーク・シティ (NYC) を想像されるかも知れませんが、私が住んでいるのは NYC から車で 5 時間程内陸に入ったシラキュースという地方都市です (写真-2)。日本の皆さんからは時々 NYC の最新グリ



写真-2 LEED プラチナ認証取得の
SUNY-ESF ゲートウェイセンター



写真-3 豊かな街路樹と Tree City
USA 認証取得の看板

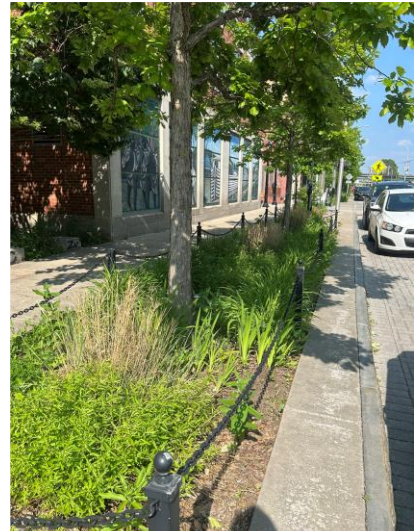


写真-4 シラキュース市内のレイン
ガーデン

ーンインフラ事情について視察したいから案内して欲しい旨の依頼を頂きます。その都度、NYC の職員として緑化に携わっておられる島田智里さんをご紹介してきましたが、彼女の負担を減らすためにも、ニューヨーク州の地方都市にも視察においで下さい。Tree City USA の認証りを 21 年間取得していたり（写真-3）、市内にはレインガーデン等のグリーンインフラも多く設置されています（写真-4）。2026 年には i-Tree のリリース 20 周年を記念してシラキュースでのカンファレンスを開催する計画も持ち上がっています。

組み込みソフトウェアエンジニアから環境エンジニアへ転身し、今は日本の方々と日本のアーバンフォレスト、緑化、グリーンインフラ等について、同じ夢や目標を語り、それらを実現すべく活動させてもらうことができているという夢漸でした。

参考資料

- 1) Arbor Day Foundation. "Tree City USA" www.arborday.org/our-work/tree-city-usa (Accessed 13-Jun. 2025).
- 2) Asia Pacific Association of Forestry Research Institutions (APAFRI). "1st Workshop of Asian Urban Forests Network (AUFN) for People & Environment" www.apafri.org/activities/2023/aufn_1stworkshop/aufnworkshop.htm (Accessed 13-June 2025).
- 3) 平林 聡(2019) 特集「都市緑化の価値を考える」緑の価値の客観的評価と波及効果—欧米諸国における i-Tree の実例を踏まえて—。日本緑化工学会誌, 44(3): 460-464.
- 4) 平林 聡 (2022) 特集「技術を学べるセミナー：グリーンインフラの評価と活用方法」～グリーンインフラを身近に感じる手法紹介～アメリカ合衆国から発信される樹木評価システム i-Tree Eco の活用方法。日本緑化工学会誌, 48(4): 581-584.
- 5) 平林 聡 (2023) 日本全国での樹木による炭素固定量算出手法の開発。日本緑化工学会誌, 49(1): 149-152.
- 6) 平林 聡・阿部 勉・今村史子・森岡千恵 (2017) 暑熱環境に対する街路樹の影響を推定する分布型 GIS モデルの開発。日本緑化工学会誌, 43(1): 243-246.
- 7) 平林 聡・今村史子・常松展充・徳江義宏・阿部 勉・市橋新・森岡千恵 (2018) 東京オリンピックマラソンコースにおける観客の熱的快適度の推定。日本緑化工学会誌, 44(1): 186-189.
- 8) 平林 聡・加藤 顕 (2024) 特集「i-Tree による生態系サービス評価・実務での活用事例と日本発の新機能実装への展望」特集にあたって。日本緑化工学会誌, 49(4): 343.
- 9) 平林 聡・中谷美紗子・和田清栄 (2021) アーバンフォレストによる生態系サービス評価のための Web マップシステムの開発。日本緑化工学会誌, 47(1): 149-152.
- 10) 平林 聡・Xiaoyang Tan・江口則和・鷺見泰弘・矢野佑樹・加藤 顕 (2022) 特集「i-Tree による生態系サービス評価—事例紹介と今後の課題」i-Tree による生態系サービス評価—事例紹介と今後の課題。日本緑化工学会誌, 48(3): 476-479.
- 11) 平林 聡・譚 瀟洋・柴田昌三 (2019) i-Tree Eco の医療費・冷暖房費削減モデルの日本向けカスタマイズ。日本緑化工学会誌, 45(1): 200-203.
- 12) 平林 聡・徳江義宏・伊藤 綾・Alexis Ellis・Robert Hoehn・今村史子・森岡千恵 (2016) 川崎市川崎区を事例とした i-Tree Eco による街路樹の生態系サービスおよびその貨幣価値の推定。日本緑化工学会誌, 42(1): 44-49.
- 13) 家根橋圭佑・平林 聡・森岡千恵・屋井裕幸・益田宗則・宇野誠一郎 (2024) i-Tree Cool Air による雨庭構成要素に応じた暑熱低減効果の定量評価。日本緑化工学会誌, 50(1): 67-70.
- 14) Johnston, M. (1996) A brief history of urban forestry in the United States, *Arboricultural Journal*, 20(3): 257-278.
- 15) 中谷美紗子・平林 聡・難波結希 (2020) i-Tree Eco との互換性・拡張性を実現する樹木構造解析システム。日本緑化工学会誌, 46(1): 71-74.

書 評 BOOK REVIEW

屋根の花園～芝棟・草屋根を日本と世界に訪ねて～

山口隆子 著, 142 頁, 定価 2,400 円
発行：八坂書房 ISBN 978-4-89694-377-1

山口隆子氏が 30 年間にわたって興味を持ってきた、芝棟（しばむね）の成著がこのほど出版された。芝棟については初めて耳にする読者もいるかもしれない。茅草屋根の棟をシバの生えた土の重みで押さえると同時に、シバの根が棟にからみつくことで棟を固定するものである。水戸黄門やマリー・アントワネットが芝棟を愛していたことを皮切りに、日本の芝棟、フランスの芝棟、フェロー諸島の草屋根が、美しい写真と共に現地に即して紹介されている。

著者の山口隆子氏は生気象学を収めた後、東京都庁の造園職として勤務し、屋上緑化や都市公園行政に携わり、現在は法政大学の地理学科で教鞭を執っている。芝棟との出会いはおかあさまが屋上緑化や壁面緑化について学んでいる著者へのおみやげとして、芝棟の絵はがきを購入してくれたことに始まり、約 30 年間にわたり興味を持ち続けてきた。

芝棟の研究には亘理俊次（1991）「芝棟～屋根の花園を訪ねて～」があり、「亘理芝棟コレクション」が東京大学総合研究博物館のサイトにあることが紹介されている。評者が 4 年生のときの教室のセミナーで亘理先生が芝棟について講演してくださったのだが、我々分子生物学時代の学生はどんな生物学的な意味があるのだろうかとかさやきあった記憶がある。亘理先生が生物学者であったのとは異なり、山口氏は地理学者、生気象学者であるので、芝棟に対する見方も異なっている。雨温図によって環境が比較されているので、東京はパリに比べて、なんと雨量が多く、気温が高いのだろうと驚かされた。

著者が初めて芝棟調査を行った川崎市立日本民家園は明治大学生田キャンパスから近いので、20 年ほど前に学生実習で芝棟の観察をしたことがある。確かに芝棟の植物が見えるのだが、学生にとっては、囲炉裏に火を入れてもてなしてくれるボランティアの活動と比べて、興味が湧かないようだった。この本があれば、ヨーロッパにまで興味が広がったと思うと残念でならない。山口氏には生物多様性緑化研究部会の zoom 連続講演会で講演していただいた。日本民家園の学芸員や民家園の位置する生田緑地の関係者がおおぜい聞く機会を得た。日本民家園や生田緑地で芝棟に対する評価が一層高まることが期待される。

講演の中で、私の住んでいる小さな町国立市の民家の修復に当たって、芝棟が取り入れられることを知った（写真-1）。「2020 年、旧本田家住宅は東京都指定有形文化財(建造物)に指定された。国立市が所有する文化財としては、初の東京都の指定文化財である。・・・2023 から 2025 年度 復原工事(予定)」。

工事の完了は、2026 年以降になるそうだが、9 月下旬から 11 月にかけて「写真にみる本田家」（郷土文化館）



写真-1 旧本田家住宅

が開催される。

「第 5 章 屋根の花園のこれから」で、著者は、芝棟や草屋根をみたことがなくても屋上緑化は目にしたことがあるのではないかと述べている。屋上緑化は、都市において貴重な緑地であり、さまざまな動物の生息地となっており、ヒートアイランド対策や地球温暖化対策にも貢献しており、日本の都市緑化技術は世界に誇るものである、と結んでいる。

現地に足を運ぶことが勧められており、見学可能な日本の芝棟が写真やメッセージとともに紹介されている。早速、身近な芝棟を訪れてみたい。

倉本 宣（明治大学 農学部）

令和6年度 臨時総会の開催

令和6年度 臨時総会が、令和7(2025)年4月14日(月)～4月28日(月)にオンラインで開催された。当総会の開催は、先の3月9日(日)に行われた第18期第9回理事会において審議、決議されたもので、高橋輝昌会長より正会員へメールにて開催が通知された。議案審議(監事の交代)は、オンラインの投票フォームによって採票し、審議した。なお、開催日現在の正会員数493名に対し、投票者数が115名(会長への委任23名を含む)であり、定足数(正会員の1/5以上:99名)を超え総会が成立した。

令和6年度 臨時総会 議事録

日時: 令和7(2025)年4月14日(月)～4月28日(月)

場所及び方法: オンライン(Google フォームによる投票)

議事及び審議経過

1. 第1号議案 監事の交代

第18期監事の田中賢治氏から、一身上の都合による辞任の申し出を受け、田中氏の辞任が承認された。また、後任の監事として木田幸男氏(所属: 一般社団法人グリーンインフラ総研, 株式会社東邦レオホールディングス, また、日本緑化工学会第9期～第16期理事を歴任)の選任が承認された。なお、交代した監事の任期は、第18期末(令和7年通常総会)までとすることがあわせて承認された。

以下の投票結果により、第1号議案について承認された。

投票者数115, 賛成92, 反対0, 会長に委任23

(以上)

日本緑化工学会 第18期第9回理事会 議事録

日時：令和7年3月9日（日）13：00～16：00

場所：国土防災技術株式会社 5階会議室（東京都港区虎ノ門3丁目18-5）及びオンライン（Zoom）

出席者：高橋輝昌，岩崎 寛，築瀬知史，今西純一，入山義久，上野裕介，内田泰三，大貫真樹子，岡 浩平，小川泰浩，小野幸菜，倉本 宣，田崎冬記，田中 淳，辻 盛生，中村華子，早坂大亮，福井 亘，松本 浩，眞見和樹，三木直子，森本淳子，山本 聡（以上理事），吉崎真司（以上監事），及び事務局

委任状提出：今井祥之，梶川昭則，橘 隆一，宗岡寿美，森川政人

第18期第9回理事会が令和7年3月8日（日）に開催され，以下の議題について審議された。

1. 役員人事

高橋会長より，第18期監事について，田中賢治氏から木田幸男氏への交代が提案され，承認された。木田氏の任期は，第18期末（令和7年度通常総会まで）とする。

また，監事の退任，就任には総会の決議が必要のため，今後臨時総会を開催し，監事交代への採否を採決することも伝えられ，了承された。採決は Google フォームを使用して実施することとし，正会員へ臨時総会の開催通知と議案，投票フォームへのリンクをメールで通知する。投票フォーム作成や案内，採票を総務部会 内田理事，小野理事が担当し，書式を理事会で確認し，4月1日以降で開催通知を行う。なお，メールアドレスの不明な正会員2名には，文書を郵送する。

開催期間（投票期間）については，迅速かつ多数の投票による議決となるよう長期間を設定せず，会則に定める「総会の招集通知を少なくとも10日前までに通知する」を「（今回投票の）締め切り日の10日以上前に通知」に読み替えて，正会員への開催通知から2週間程度とすることで了承された。また，投票の際は，複数回の誤投票を防ぐため投票者氏名と所属も回答することとし，項目として賛成・反対と，「委任状」（会長に委任）の選択をできるようにすることとした。

2. 第56回日本緑化工学会大会（2025年京都大会）について

第56回日本緑化工学会大会（以下，56回大会とする）運営委員長 今西理事から，大会案内及び，開催準備の進捗状況が報告された。前回理事会以降で新たに以下の事項を決定したことが報告され，承認された。

- ・現地見学会（大阪・関西万博会場）参加費について：資料代500円を加えた参加費（学生会員は資料代無料）に再設定した。
- ・大会参加申し込み，研究交流発表ほか各種申し込み：学会ホームページ（以下，HPとする）の大会サイトの「大会参加申込フォーム（Google フォーム）」にて行えるよう整備した。研究交流発表の要旨原稿も，テンプレートのダウンロードとフォームへの原稿PDFをアップロードできるようにし，これまでのメールでの数回のやりとりにて提出していたことを省力化できた。
- ・Wi-Fi環境の整備：主会場では，学校・研究機関の関係者に提供されているWi-Fi：eduroamが利用可能。また，大会会場の休憩室で一般Wi-Fiが利用できる。
- ・情報交換会（懇親会） 大学生協にて開催。
- ・現地見学会（担当：福井理事） 万博側との現地説明等の協力調整が済み，講師企業が決定した。
- ・築瀬副会長に，入金及び会員確認，領収書発行等を依頼。

また，収支予算については，予算内で運営できる予定であることが報告された。

3. 学会費について

経理部会長 築瀬副会長より、未納分会費の整理を実施中であり、進捗状況が報告され、了承された。来期までに負債整理の目途がつくことともに、複数回の支払督促によりほぼ全会員の連絡先（メールアドレス）が入手できたことも報告された。

4. コミュニティレターの発行と編集状況について

編集委員会 岡理事より、コミュニティレターに関する内容が報告された。

1)第1号の発行と賛助会員への送付について

編集部会 岡理事より、1月下旬にコミュニティレター（以下、CLとする）第1号の発行（ニュースメール（以下、NMとする）20250130版にて会員に通知）及び、学会HPへ公開したことが報告された。また、賛助会員へ送付用の冊子版を作成し、2月中旬に郵送したことも報告された。

2)コミュニティレターの編集状況

岡理事より、CLの作成について、今期中は編集委員会を中心に行い、56回大会までに第2及び第3号を発行する予定であることが報告され、了承された。内容として、会員への各種報告の他、コラムを充実させ、「新会員の自慢」、「研究ノート」、「緑地探訪」の3つのコラムを連載する。なお、「研究ノート」は各研究部会の担当持ち回りとし、部会長に執筆を依頼することも伝えられた。

また、今後発行の第2、3号には、56回大会関連の内容を掲載していく予定であり、第2号（4月下旬発行予定）には56回大会案内やGoogleフォームでの申し込み、HPの大会サイトの周知等を掲載、第3号（7月下旬～8月中旬発行予定）は56回大会の最新情報（最終プログラム等）を、大会運営委員長の今西理事と協議して掲載する。

なお、来期の発行となる第4号以降については、作成担当や賛助会員への冊子版送付の継続について検討したいと伝えられた。

5. 広告関連

デジタル改革ワーキンググループ（以下、デジタル改革WGとする）広告担当 田中理事より、広告希望の5社すべての広告をCL第1号に掲載でき、賛助会員に冊子版を送付したことが報告された。

CLの冊子版に関しては、印刷・郵送費はかかるが、賛助会員へはCLが手元まで届くことで会員である意識づけ・会員継続に有効と考え、当面は冊子版送付がよいのではないかと伝えられた。また、賛助会員数・広告数は学会運営に直結するため、今後も収入確保の検討・議論が必要と意見された。

6. 学会ホームページについて

デジタル改革WG HP担当 辻理事より、学会HPの更新状況が報告された。以下の内容について承認された。

1)学会HP内の各webサイト管理委託

辻理事より、学会事務局を委託する勝美印刷(株)へ、事務局業務に加えた学会HPの各webサイト管理業務委託の見積もりをしたことが報告された。見積金額も妥当とみられることから、次年度からの契約を検討することが伝えられ、管理委託費を次年度予算に計上することが承認された。今後、追加項目が増えることも考えられ、年度ごとに見積もりを行うことも加えられた。

また、今年度予算状況において可能である場合は、契約前倒しで、年度内の4～7月末の契約も進めたいとの説明があった。

2)第56回日本緑化工学会大会サイトの作成

辻理事より、56回大会サイトの作成、運営を、これまでに続きつるた氏に依頼することが報告された。

新しいサイトの大枠は既に HP に公開（閲覧可能）しており、今後新たな情報は、今西理事とつるた氏で直接やりとりをおこない更新する。（サイトの場所は、トップページー研究発表会（大会））

3) その他のサイトについて

辻理事より、その他のサイトについて説明された。

- ・学会誌サイト（トップページー学会誌・出版物ー日本緑化工学会誌）

：学会事務局からの学会誌譲渡及び、田中理事の過去学会誌の取り込みファイル（PDF）、J-Stageからの取り込みを収納し、バックナンバーが完了した（欠落が2号あり）。作業にかかった経費を計上したことが報告され、了承された。バックナンバーは HP からダウンロードができ、アカウントとパスワードは、NM で周知する。

- ・CL サイト（同上一コミュニティレター）

：サイト内に第1号を掲載した。

7. 会務の分担

高橋会長から、学会の活動内容が多様化し担当部会が不明確な会務があることや、会則に明記されていない新たな会務が生じていることがあげられ、会務の確認・整理及び、各会務の担当部会を明確にすることへの提案があった。また、会務の内容を明確にするために細則を作成することや、新たな部会を立ち上げることも提案された。これらは会則の改定を伴うことから、次回理事会以降で検討していくこととなった。

なお、細則については、会長が次回理事会に案を作成することとし、各部会も作成を検討することとなった。

8. 日本緑化工学会賞の推薦について

研究部門長 岩崎副会長から、2025 年日本緑化工学会賞の受賞候補者の推薦募集を行うことが報告された。推薦書等の提出期日を5月16日（金）とすることが了承された。今後、HP、NM に案内する。

9. 各部会の連絡・報告

9-1 日本農学会への加盟承認について

高橋会長より、日本農学会への入会手続きがすすめられ、令和7年2月8日に日本農学会総会が開催され当学会の入会が満場一致で承認されたことが報告された。また、連絡担当に中村理事を任命したことも伝えられた。毎回の会議へ、中村理事が出席する。

今後の3月17日開催の会議へは、入会後初めての参加であり会長が代理出席することとなった。

9-2 学術著作権協会、EBSCOhost について

総務部会 内田理事より、学術著作権協会等との契約について報告され、内容が了承された。

1) 学術著作権協会

前回理事会で承認された(一社)学術著作権協会への AI 利用に係る追加契約及び、当学会の著作として CL の登録が行われたことが報告された。

2) EBSCOhost

EBSCOhost（EBSCO 社オンライン学術論文検索サービス）との契約について、会長・副会長はじめ関係者に契約約款（当学会誌の収録許諾）を事前に精査していただいた結果、特に異論等なかったため、今後、約款へ署名することが報告され、承認された。

※内容詳細については第8回理事会議事録を参照。

9-3 災害復興支援・災害対応指針検討委員会（仮称）の設立

災害復興支援・災害対応指針検討委員会（仮称） 中村理事より、上野理事とともに設立準備を行っている「災害復興支援・災害対応指針検討委員会（仮称）」の今後の活動予定について報告があった。具体的な今後の予定が示され、承認された。今後、会長、副会長、研究部会長、理事から推薦の有識者へ当委員会に関するアンケートを実施して、アンケートをもとに委員会素案（委員（推薦）、委員会で取り組むべき内容、学会としてどのようなフェーズに何を提供、貢献できるか等）を検討していく。また、委員は会員から募集、会員からの推薦によって検討・決定し、委員の決定後は、委員会と会員に向けたwebセミナーを開催して、災害復興支援の可能性や留意点、当学会としての災害対応への在り方を検討していく。9月の56回大会に中間報告と災害対応指針策定のための課題整理を発表することも予定する。大会後、「災害復興支援・災害対応指針（案）」をとりまとめてHPに公開し、会員との意見交換ができる機会を随時設ける。なお、期間は2年を予定していることも伝えられた。

なお、当委員会は時限のある臨時委員会に位置付けられ、委員会名称について、今後正式に設立予定の「災害対応委員会」（常設委員会）との区別がつきにくく、委員会の立ち上げまでに分かりやすい名称を検討する。

9-4 学会誌の編集（編集部会）

編集部会 岡理事より、以下の内容について報告された。

1)学会誌の編集状況

岡理事より、学会誌の編集状況が報告された。①第50巻2号（J-stageへ発行済）：全文PDFを目次を含めて編集中で、今後、デジタル改革WG HP担当の辻理事に表紙と奥付付加の作業を依頼し、HPに公開する。②第50巻3号：3月中にJ-Stageに公開予定。内容は、学会賞受賞者寄稿3編、特集1件（5編）、技術報告3編。また、今後の予定として、審査中論文6編、技術報告1編、また、昨年9月開催の第55回日本緑化工学会大会のシンポジウム、研究集会を特集として掲載予定であることが報告された。

2)大会特集号の投稿状況について

岡理事より、56回大会の大会特集号（第51巻1号）の論文部門申し込み及び、原稿提出が締め切られ、申し込み41件、投稿数32件と、昨年、一昨年と比較し多数の件数が申し込まれていることが報告された。今後、原稿の筆頭著者及び、責任著者の情報・会員状況の確認のため、事務局へ照会することも報告された。

3)賛助会員の特典の見直しについて

岡理事より、賛助会員に付与される学会誌投稿他についての特典が現状と適合していなく、次期には再度検討が必要との提案があった。次回理事会までに、編集部会と、関連する総務部会、経理部会で話し合い、他学会の規定も参考にしながら理事会に審議することとなった。

9-5 会員の入退会と管理（総務部会）

総務部会 内田理事より、令和6年11月1日～令和7年1月31日の会員の異動が報告され、承認された。

9-6 経理及び収支状況（経理部会）

経理部会 入山理事から、令和7年3月現在の収支報告について説明され、収支が問題なく運営できていることが報告され、承認された。

9-7 ICLEE 及び LEE に関する報告（学術国際交流部会）

1)LEEの発刊状況

学術国際交流部会 森本理事より、英文誌LEE（Landscape and Ecological Engineering）の発刊状

況について、順調に発刊されており、2025年1月に第21巻1号を発刊（論文14編掲載）したことが報告された。また、発行のSpringer社から、2023年ICLEE大会後に企画された特別集会の反響によって、ダウンロード数が大幅に増加していると報告されたことも伝えられた。

2) 「joint first author」設定の提案

森本理事から、多くの国際誌で設定されている「joint first author」（第一著者が複数人置かれる）について、当学会でも設定するのはどうかとの提案があった。国内学会誌では多くが未設定（記述がない）のようであり、高橋会長から理事方に情報提供の依頼があった。

9-8 検討会等の企画（企画・事業部会）

企画・事業部会 中村理事、松本理事より活動報告が伝えられた。

1) 緑化工セミナー

松本理事より、企画・事業部会で継続企画、開催の「未来の緑化工セミナー」について報告された。

・第4回（2025年1月24日（金）開催）：「緑化工学のフロンティアに向けて」

話題提供 小川泰浩氏、阿部建太氏 司会 松本 浩氏 CPD ポイント 1.5

参加者 35名（会員26名、学生2名、一般7名）

・今後の予定 第5回を2025年3月12日に開催予定。

テーマ：「緑化工による新たな二次林再生・森づくりの展開」

話題提供（予定） 中島宏明氏、西野文貴氏 司会 松本 浩氏 CPD ポイント 1.5

・セミナーにCPDポイントを付与する。CPD申請・登録は小野理事、石垣氏が担当。

2) 現地検討会「能登半島地震による影響と自然再生（1）」及び、「地域性種苗調達ワークショップ・意見交換」についての報告

中村理事より、令和7年1月12～13日に開催した石川県能登地方での現地検討会「能登半島地震による影響と自然再生（1）」（以下、能登現地検討会とする）及び、翌日1月14日に行われた「地域性種苗調達ワークショップ・意見交換」（以下、地域性種苗WSとする）について開催報告があった。当企画は、昨年の令和6年奥能登豪雨の発生によって開催を延期していたもので、今回を第1回とし数回を開催する予定。能登現地検討会には、和歌山大学の教員・学生を含め16名が参加し、奥能登地方を中心に、輪島市内の市街地や河川、珠洲市の漁港・海岸の被災状況等を見学した。また、地域性種苗WSには、前日に続き13名が参加し、能登町内浦地区の農業法人の農地見学と意見交換、また、石川県奥能登農林事務所において県の事業紹介と意見交換を行った。内容の詳細については今後報告する。なお、今後も複数回の現地検討会を予定し、第2回を5月頃に開催予定であることも報告された。

9-9 防災学術連携体報告（防災学術連携体）

防災学術連携体 担当委員 小川理事から、防災学術連携体オンラインシンポジウムが開催されることが報告された。当シンポジウムでは、令和8年度中に設置を進める「防災庁」への学術界からの協力・貢献について考えるために企画され、当学会の動きにも参考になる内容であり、理事方へ発表募集と、聴講・視聴の依頼があった。

（概要）

オンラインシンポジウム「防災庁への期待」 災害応急対応力をどう強化するか（仮）

主催 （一社）防災学術連携体

日時 令和7年4月30日（水）13時～17時（予定）

開催方法 Zoom webinar（定員500名、要申込）及び、Youtube（申し込み不要）

政府から参加者 内閣府防災担当、防災庁設置準備アドバイザー会議委員

9-10 研究部門の活動報告

1) 積雪寒冷地緑化研究部会

積雪寒冷地緑化研究部会 宗岡理事より、当部会共催の講演会案内が配布され、周知された。

(概要)

令和 7 年 (第 37 回) 植生技術講演会

主催 (一社)北海道造園緑化建設業協会

共催 (一社)日本造園建設業協会北海道総支部、日本緑化工学会積雪寒冷地緑化研究部会

日時 令和 7 年 3 月 11 日 (火) 13:30~17:00

講演内容

第 1 部: 草本植物の根系を含む土供試体の強度定数 ($c \cdot \phi$) 評価 宗岡寿美氏 (帯広畜産大学)

第 2 部: 積雪寒冷地に適した緑化植物の検討 佐藤厚子氏 (寒地土木研究所)

2) 緑・健康研究部会

緑・健康研究部会 山本理事より、当部会主催の見学会が開催されることが周知された。担当は、山本理事、大塚芳嵩氏、岡田準人氏で、現在注目の都市公園での開催であり、申し込みが呼びかけられた。会議室は検討中。

(概要)

日本緑化工学会 緑・健康研究部会 見学会 2025 うめきた公園で緑の多面的機能を体感する一

日時 2025 年 5 月 31 日 (土) 13:00~16:00 (雨天決行)

内容 うめきた公園 (JR 大阪駅に直結の世界最大級の都市公園) の計画趣旨を学んだ上で現地見学を行い、緑地公園が人々に及ぼす多面的な機能、緑の価値について理解を深める。

講師 小松良明氏 ((株)日建設計)

対象者 当学会員 ただし、学生の場合は非会員でも参加可能。定員 20 名 (先着順)

申し込み Google フォームに必要情報を入力 (後日詳細案内)

3) 乾燥地緑化研究部会

乾燥地緑化研究部会 三木理事より、公開シンポジウムの案内があり周知された。

(概要)

令和 7 年度公開シンポジウム予定 (テーマは未定)

日時 (予定) 2025 年 7 月 5 日 (土)

開催場所は東京農業大学 (対面開催)、オンライン併用は未定。

講師 東京農業大学教員

9-11 ELR の開催について

高橋会長から、前回理事会にて次回 ELR 大会 (日本景観生態学会、応用生態工学会との合同大会) の開催年を検討することとなっており、2027 年または 2028 年とすることを森本理事から両学会に打診し、ともに 2027 年開催で了承したとの報告を受けたことが伝えられた。次回 ELR 大会は当学会が幹事学会であり、今後、開催地の決定や実行員会の設立等準備、作業スケジュールを検討していく必要があり、理事方への協力が申し伝えられた。

10. その他

1) 第 18 期役員の在任期間・授賞履歴情報の収集について

総務部会 内田理事、小野理事より、外部から当学会へ有識者紹介の依頼があった際の情報通知や、次期役員選出等の整理のため、今期役員及び評議員、監事について、在任期間や授賞歴等の情報を収集することが伝えられた。今後、小野理事が記入シートを作成、メール送信し、各自記入の上、返信することとなった。

2)コミュニティレターへの研修会等案内掲載の依頼

編集委員会 岡理事より，CL への案内掲載のため，今後の研修会等の案内原稿提出が依頼された。

3)研修会等のお知らせ

橘理事より，東京農業大学 大学戦略研究プロジェクトチームが主催する能登の里山を活用した防災，環境と調和した震災復興に関する研究の一環として，現地の輪島市においてワークショップを開催することが案内された。

(以上)

日本緑化工学会 第18期第10回理事会 議事録

日時：令和7年6月29日（日）13：30～16：30

場所：国土防災技術株式会社 5階会議室（東京都港区虎ノ門3丁目18-5）及びオンライン（Zoom）

出席者：高橋輝昌，岩崎 寛，築瀬知史，今井祥之，今西純一，入山義久，内田泰三，大貫真樹子，岡 浩平，小川泰浩，小野幸菜，梶川昭則，倉本 宣，田崎冬記，橘 隆一，田中 淳，辻 盛生，中村華子，早坂大亮，福井 亘，松本 浩，眞見和樹，三木直子，宗岡寿美，森川政人，森本淳子，山本 聡（以上理事），木田幸男，吉崎真司（以上監事），及び事務局

委任状提出：上野裕介

第18期第10回理事会が令和7年6月29日（日）に開催され，以下の議題について審議された。

1. 日本緑化工学会賞について

1) 日本緑化工学会賞 受賞者の決定

研究部門長 岩崎副会長から，令和7年6月26日（木）に令和6年度日本緑化工学会賞（以下，学会賞とする）の選考委員会を開催し，各賞の受賞候補者を審査，選出したことが報告された。選考委員会からの推薦を受け，以下の受賞者が承認された。

【研究奨励賞】 ^{うめはらみずき}梅原瑞幾氏（千葉大学大学院 看護学研究院特任助教）

題目：介護現場における緑化および緑との関わりによる勤務者のストレスケアに関する研究

【功 績 賞】 ^{やまなかのりかず}山中典和氏（鳥取大学名誉教授）

題目：乾燥地緑化植物の生理生態研究の発展と普及に対する功績

【功 績 賞】 ^{しばたしょうぞう}柴田昌三氏（京都大学名誉教授／現 兵庫県立淡路景観園芸学校 学長）

題目：タケ・ササ類をはじめとする在来植物を利用した緑化技術の開発と普及に関する功績

2) 学会賞の推薦依頼

岩崎副会長より，学会賞候補者の積極的推薦が依頼された。特に以下の賞については，推薦の活性化を重点的に図る議論がされたことも報告された。

- ・功績賞 当賞の候補者は，緑化工学と本学会の発展に多大な貢献をされた方であり，理事会へ該当者の積極的推薦を依頼する。
- ・研究奨励賞 当賞は若手会員への推薦が奨励されており，該当者にとって研究の励みになるとともに，今後の学会運営の担い手として期待したく，選考委員である各研究部会長と理事会へ積極的推薦を依頼する。
- ・論文賞 平成30年度（2019年9月授与）以降，当賞の推薦，受賞がないため，各研究部会，理事会へ積極的推薦を依頼する。また，編集委員会で該当者を推薦する案も話し合われた。

2. 令和6年度臨時総会

総務部会長 内田理事より，令和7年4月14日（月）～28日（月）にオンライン投票にて開催された令和6年度臨時総会（第1号議案 監事の交代）について，第1号議案が承認されたことが報告された。新監事に木田幸男氏が就任した。

3. 次期役員の改選

1) 第19期役員の推薦および役員案の調整について

高橋会長より、次期（第 19 期）役員の改選にあたり、事務局案の作成のため、総会に先立ち正会員からの推薦を募り役員案を事前調整することが提案され、承認された。今後、次期理事・監事の推薦書式や、推薦の受付期間等を検討する。予定として、8 月上旬に推薦を締め切り、8 月中に候補者の資格（正会員かつ会費滞納がないこと）と本人意思を確認し、役員案を調整する。なお、推薦方法はオンライン（Google foam 利用）で行うこととし、フォームを総務部会で作成後、ニュースメール（以下、NM とする）で会員に配信し、推薦を依頼する。

2) 役員在任期間情報について

総務部会において、次期役員選出の整理のため今期理事、監事の在任期間情報の収集をおこなうことが報告された。情報収集を小野理事が担当し、記入シートを小野理事からメール送信、各理事返信の情報をまとめる。

4. 令和 7 年度総会資料の作成

総務部会 大貫理事より、令和 7 年度通常総会の資料作成のため、各部会の担当理事へ、各部会の令和 6 年度事業報告および令和 7 年度事業計画の作成を依頼した。期日は 7 月末日までとし、メールにて提出（経理部会と大会運営委員会については、内容の最終確定後で送付）する。

5. 経理部会事務要領

経理部会 築瀬副会長より、令和 7 年度総会以降より運用する経理部会事務要領（案）の作成について報告され、内容が了承された。これまで歴代の経理部会で改訂を伴いながら使用してきた要領を、今期改訂内容も含めて改めてまとめた文書であることが説明された。承認された改訂内容を以下に示す。

（年会費について）

- ・年会費の納入案内は、原則メール通知とする。来期より、請求書等書類の郵送希望者には入会手数料として会費に加えて 1,000 円を徴収する。
- ・滞納 2 年以上で回収見込みのない未収金は、理事会での未収金放棄の承認を受け、2 年遡って退会の措置をとる。ただし、退会となった後も未収金の請求は継続し、入金があった場合は「雑収入」として収支に計上する。
- ・学生会員は、大学（短大、大学院）、高等専門学校に在籍している個人とし、企業等に属し給与収入を得る者には適用されない。
- ・学生会員は単年度での会員維持とし、年度末までに入金がない場合は退会とする。
- ・学生特例は、一個人に一度までを認める。

（支出について）

- ・経費請求ができるのは、会長、副会長、各部会長および担当理事、研究部会長、各委員長に限る。
- ・現在、JABEE（(一社)日本技術者教育認定機構：理工学・建設分野 CPD の付与機関）、JAFEE（(公社)森林・自然環境技術教育研修センター：森林分野 CPD 付与機関）の 2 か所の CPD ポイント発行機関へ加盟しているが、JABEE についてはここ最近の学会関連行事についてプログラム登録を申請していなく、今後、企画・事業部会で申請方法の変更がないか、また、受講者の建設系 CPD の申請状況を確認し、加盟継続を検討する。JAFEE については、当学会の CPD 申請の窓口としており、加盟を継続する。

6. 第 56 回日本緑化工学会大会（2025 年京都大会）

第 56 回日本緑化工学会大会（以下、56 回大会とする）運営委員長 今西理事より、大会準備が順調に進んでいることが報告された。新たに次の内容が報告され、承認された。

- ・懇親会を、大会会場の芝蘭会館にて開催できるよう調整中。
- ・現地見学会を含む大会スケジュールを近日中に決定し、NM に案内する。

- ・大会プログラム等は、電子配布（PDF ファイル）とする。大会参加者は、必要に応じて各自パソコンにてプログラム等を閲覧、または、事前印刷する。
- ・大会直前に開催する第 11 回理事会は、9/7（日）13:00 より京都府立大にて行う。福井理事に担当いただき、会場費は無料。
- ・研究交流発表会の要旨集に企業広告を掲載する。
- ・総会資料の印刷を運営委員会でおこなう。
- ・会場確保のため研究集会の申し込み状況を把握したいので、研究集会の開催を希望する研究部会、委員会は早めに今西理事に通知する。

7. 日本緑化工学会ホームページ関連

1)業務委託

①ホームページ WEB サイト管理業務委託

デジタル改革ワーキンググループ（以下、デジタル改革 WG とする） ホームページ（以下、HP とする）担当 辻理事より、令和 7 年 4 月より先行契約（契約期間：令和 7 年 4 月 1 日～7 月 31 日）の勝美印刷(株)（学会事務局業務委託先）への学会 HP の WEB サイト管理業務委託状況について、問題なく運用できていることが報告された。

また、8 月以降は、学会年度に合わせ令和 7 年 8 月 1 日～令和 8 年 7 月末日の 1 年間の契約として、先行契約内容に追加した項目で勝美印刷(株)と契約する予定であることも報告され、承認された。

②56 回大会サイト作成、運営

辻理事より、つるた氏に依頼中の 56 回大会専用サイトについて進捗が報告された。サイトは既に公開しており、今後の最新情報を今西理事からつるた氏へ伝え、内容を更新する。

2)入会フォームの修正

辻理事より、入会フォームの内容について、令和 6 年通常総会において承認された改定内容に準じ修正することが報告された。勝美印刷(株)への作業見内容に対する見積もりが示され、同社への発注、費用ともに承認された。

3)勝美印刷(株)との事務局業務更新について

辻理事より、令和 7 年度の勝美印刷(株)との業務契約更新について、HP 関係内容を追加した業務委託契約書（原案）が示された。

内容のうち、勝美印刷(株)に保管されている学会誌バックナンバー（以下、BN とする）に関し、辻理事の作業によって BN アーカイブ（BN をすべて PDF 化し整理、HP に公開）が完成したことから、BN は「現有の図書に限り 3 部ずつ残し、1 部を勝美印刷(株)、他 2 部を学会理事の所属大学にて保管・管理」することとなり、この部分を修正した契約書にて書面が承認された。また、コミュニティレター（以下、CL とする）については、発行後 1 年間保管し、その後は保管せずに破棄することとなった。

4)学会誌 PDF 版作成について

今後の学会誌の PDF 版作成（HP への公開）について、編集委員会 岡理事の提案により、目次・奥付の作成を J-stage 公開委託先であるジャーナルサポート社に作成委託することが承認された。（11-1 に関連）

8. 災害復興支援・災害対応指針検討委員会（仮称）の活動

災害復興支援・災害対応指針検討委員会（仮称）中村理事（上野理事代理）より、委員会の活動報告および今後の予定が示された。

（活動報告）

- ・「防災学術連携体シンポジウム：防災庁への期待 災害応急対応力をどう強化するか」（令和 7 年 4 月 30 日（水） オンライン開催）にて、これまでの当学会の取り組みについて発表した。

（11-4 に関連。）

- ・「日本緑化工学会 災害復興支援・災害対応指針検討のためのアンケート」（自然災害に対する取り組みと学会としてのニーズへの意見、知見者・事例の紹介など）を、研究部会長および、災害調査プロジェクト関係者へアンケートの協力を依頼した。締め切りを 7 月末日とし、今後の理事会で結果を発表する。

（今後の予定）

- ・56 回大会で開催する研究集会「緑化工学を活かした災害復興支援を考える」にて、委員会としての本格的な活動を開始する。目的は当学会の災害対応への行動指針となる「災害復興支援・災害対応指針（案）」の策定であり、上野理事（委員長）、中村理事（副委員長）を中心に活動する。期限は 2 年間とする。
- ・前出のアンケートを受け、理事等からの推薦により委員会発足の準備会合の参画者を募り、災害復興支援の可能性・留意点、学会としての活動方向性を検討する。
- ・第 11 回理事会（56 回大会の直前に開催）にて、委員会の正式名称を審議、確定する。会員を対象に委員の募集を開始する。
- ・56 回大会にて研究集会を開催する。

9. 広告関連（学会の収入維持）

デジタル改革 WG 広告担当 田中理事より、学会の収入維持のために実施してきた広告形態等の検討と実施内容について報告された。広告形態は、HP へのバナー掲載および CL（ページ分量 2 種）を設定し、両者あわせて現在 5 社が広告を掲載中。また、バナー位置を HP トップページとすることや、広告費の納入を一括、分割の選択対応と選定可能など、広告提供者に好ましい工夫を考えていることも報告された。

また、今後の学会の収入維持のため、会費未納者を減らすことや、会員（賛助会員含む）を増やす働きかけ、広告掲載機会を増やす（大会や特集記事と連動）など、引き続きの検討が必要との内容も話し合われた。理事方へも広告の声かけを依頼された。

10. ELR 大会

高橋会長から、2027 年開催予定の ELR 大会（日本景観生態学会、応用生態工学会との合同大会）について、開催地を検討中であることが報告された。当学会が幹事学会であることから、今後も種々の検討への理事方への協力が申し伝えられた。

11. 各部会の連絡・報告

11-1 学会誌の編集（編集部会）

編集部会 岡理事より、学会誌およびコミュニティレターの編集状況が報告された。また、今後検討が必要な事項について提案があった。

1) 学会誌および、CL の編集状況

①第 50 巻 4 号（5 月末発行号）：令和 7 年 6 月 25 日（水）に J-stage へ公開、NM（20250625 版）にて会員に配信済み。論文 5 編、技術報告 1 編、新博士紹介 1 編。

②第 51 巻 1 号（大会特集号）：令和 7 年 8 月末に配信予定。

論文部門 投稿 32 編（申し込み 41 編）、技術報告部門 投稿 22 編（申し込み 25 編）、両者あわせて発表は約 40 編の見込み。

③第 51 巻 2 号以降

審査中原稿 論文 5 編、短報 1 編、技術報告 2 編。特集として「外来草本ヨシススキの分布域拡

大状況の確認と課題」(第55回大会研究集会：斜面緑化研究部会(橘理事))

④CL 発刊状況

- ・第2号：NM(20250507版)にて会員に配信済み、全42ページ。5月下旬に賛助会員に冊子版を発送済み。
- ・第3号：8月中旬にNMにて配信予定。原稿締め切りは7月27日(予定)。大会最終案内(プログラム含む)も掲載予定。また、研究ノート執筆は、海岸林・沿岸域緑化部会が担当する。
 ※7月末に論文掲載を決定後、大会運営委員長の今西理事がプログラムを作成、岡理事がNMに配信。
 ※第4号の研究ノートは斜面緑化研究部会が担当。

2)検討事項と提案

①学会誌のHPへの全文PDF公開

岡理事より、辻理事とともに、現在の第50巻2号～4号(大会号以外)の原稿について、HPへの全文PDF公開を進めていることが報告された。2～4号の目次作成を、J-stage 公開委託先であるジャーナルサポート社に作成委託することが承認された。

②学会誌発行の号数について

今後の学会誌発行の号数について、岡理事から、第51巻は現行に同じ(年4回発行、1号を大会号、2～4号は通常号)とし、第52(または53)巻から年2号(1号を大会号、以降のすべてを2号)の発行形態を目指すことが提案され、了承された。年2号発行によって、掲載が決まった原稿から随時公開し新しい論文が早く引けることで著者・読者双方に利点となり、当初目標とした電子版運用ができることとなる。一方で、学会誌の区切りが明確でない、特集数・年間ページ数(原稿ボリューム)の減少の懸念、また、全文公開時の原稿並び(ページが整わない)や会員へのアナウンス時期などの新たに検討が生じる内容があり、岡理事を中心に編集部会で試行していくこととなった。

③賛助会員への対応

現在の規定では、賛助会員の特典に学会誌への投稿や大会での発表の資格があり、賛助会員である企業・組織に所属する全員が正会員と同等のメリットを享受可能ということになるので、見直し・整理が必要との提案があった。学会誌の投稿資格を、正会員と学生会員に厳格化する等の改正が提案された。

また、賛助会員へのNL郵送配布について、冊子印刷と郵便代の経費も大きい、今後の賛助会員の特典見直し内容や学会予算をもとに、継続有無の検討が必要との提案もあった。

上記は、会則の改訂も伴う内容であり、今後継続して協議することとなった。なお、岡理事からは、賛助会員への特典変更の案内を、次回大会の発表募集を案内する12月頃に行いたいということも申し添えられた。

3)追悼文の掲載

平成7年度功績賞の受賞者である村井宏先生(岩手大学名誉教授)のご逝去が報じられた(令和7年6月14日死去、享年97歳)。岡理事より、村井先生への追悼文および遺稿を、学会誌やNLに掲載することが提案された。追悼文は吉崎監事が執筆されることとなっている。また、遺稿の『令和七年早春の「大船渡山林火災」を考える』(A4用紙約2枚半)は、吉崎監事がご遺族から預かっており、今後、学会誌、NL、またHPへの掲載については、吉崎監事と岡理事に一任し、両理事で検討することとなった。

11-2 会員の異動(総務部会)

総務部会 内田理事より、令和7年2月1日～令和7年5月31日の会員の異動が報告され、承認さ

れた。学生会員が16名入会し、すべて特例制度を利用した。

11-3 経理および収支状況（経理部会）

経理部会 梶川理事より、令和7年6月15日までの収支報告について説明され、収支が問題なく運営できていることが報告され承認された。なお、投稿料および広告料収入が予算以上であったこと、また、学会誌刊行費が予算をやや超過していることが説明された。

11-4 防災学術連携体の活動報告（防災学術連携体）

防災学術連携体 担当委員 小川理事から、令和7年4月30日に開催された「防災学術連携体オンラインシンポジウム」の報告があり、日本緑化工学会として上野理事、中村理事が、これまでの学会の取り組みや能登の活動を発表したことが報告された。（【セッション5】防災における重要な視点 発表3「里山地域での応急対応と平時の備え：能登からの報告」、日本緑化工学会 上野裕介（石川県立大学）・中村華子（金沢大学））

また、防災学術連携体で主催する以下の予定も報告された。

- ・6月25日（水） 市民へのメッセージ発出「2025年夏秋の気象災害に備えましょう」（オンライン開催）
- ・7月30日（水）（一社）防災学術連携体 定時総会および意見交換会（オンライン開催） 小川理事出席予定。
- ・8月19日（火） 第7回「防災に関する学術会議，学協会，府省庁連絡会」（対面およびzoom）
能登半島地震・豪雨災害の教訓に基づき，広域地域災害の備えについて議論する。
- ・9月6日（土），7日（日） ぼうさい国体2025（開催地：新潟市）
シンポジウム「複合災害に立ち向かう防災の知恵－新潟と能登の経験から」（地盤工学会が運営）
セッション予定があり，小川理事より後日連絡。

11-5 EBSCO ならびに学術著作権協会との契約完了について

総務部会 内田理事より、EBSCO 社との契約（EBSCOhost への参画）および、（一社）学術著作権協会との契約（AI 利用に係る追加契約，CL の著作登録）が完了したことが報告された。契約文章が示され，了承された。

11-6 企画・事業部会

企画・事業部会 中村理事，松本理事より活動報告と今後の計画が報告された。

1) 緑化工セミナー

松本理事より，松本理事・倉本理事を中心に企画調整・実施中の「未来の緑化工セミナー」について，第5回を開催したことが報告された。

2025年3月12日（水）開催 テーマ：「緑化工による新たな二次林再生・森づくりの展開」

話題提供：中島宏明氏，西野文貴氏 CPD ポイント 1.5

参加者 37名（会員22名、学生4名、一般参加11名） チケット収入 9,162円

2) その他事業計画

中村理事より，今後の事業計画について以下が報告された。

- ・未来の緑化工セミナーについて
引き続き実施の予定であり，話題提供者を推薦いただきたい。
- ・企画中のオンラインセミナー
テーマ「能登半島のグリーンインフラ復興を考える」
- ・現地検討会 「能登半島地震による影響と自然再生（2）」の実施を計画中。

※第1回を令和7年1月に開催済。

11-7 国際学術交流部会

学術国際交流部会 森本理事より、英文誌 LEE (Landscape and Ecological Engineering) の状況が示され、掲載原稿が増加しており良好との報告があった。

- ・掲載原稿数 現在 31 件+オンライン版掲載 13 件
- ・ジャーナル評価指標 (Impact Factor) : 1.9 (2024 年) 昨年 (2023 年 : 1.7) より増加
- 5 年間指標 (5-year Impact Factor) : 2.2 (2024 年) 同 (: 2.0) より増加
- 原稿の初回判定までの期間 : 28 日 (2024 年) 同 (: 28 日) と変わらず

また、ダムの水質システム等に関する投稿を 2025 年 9 月 30 日まで募集中との呼びかけがあった。

11-8 研究部門の活動報告および計画

1) 緑・健康研究部会

緑・健康研究部会 山本理事より、研究部会主催の見学会について報告された。参加者からは、計画者の説明を聞いた上で現地を見学できたことで理解を深めることができ、大変よい評価であったことが報告された。

(概要) 日本緑化工学会 緑・健康研究部会 見学会 2025

— うめきた公園で緑の多面的機能を体感する —

- ・日時 2025 年 5 月 31 日 (土) 13:00~17:00
- ・場所 現地見学 : うめきた公園 (大阪市北区大深町 JR 大阪駅直結)
- 講演・意見交換会 : 大阪産業大学梅田サテライトキャンパス (大阪市北区梅田)
- ・内容 うめきた公園についての講義、現地見学および意見交換会
- ・講師 小松良朗氏 ((株)日建設計)
- ・講演題目 「うめきた公園の計画趣旨について」
- ・参加者 19 名 (学生 12 名, 当学会員 7 名)

2) 乾燥地緑化研究部会

乾燥地緑化研究部会 三木理事より、公開シンポジウム開催が案内された。開催趣旨として、東京農業大学の 30 年以上にわたるジブチ共和国での乾燥地緑化研究において、これまでの成果や課題を報告し、今後の展望を考える機会とすることが案内された。

なお、シンポジウムの内容は、学会誌の特集として原稿執筆の予定。

(概要) 令和 7 年度公開シンポジウム 2025

「東アフリカ・ジブチ共和国における東京農業大学の乾燥地研究の 30 年」

日時 2025 年 7 月 5 日 (土) 13:00~16:30

開催場所 東京農業大学 対面, オンライン (zoom ミーティング) 併用

講師 東京農業大学教員 6 名, 総括として吉崎監事

主催 日本緑化工学会 乾燥地緑化研究部会

後援 日本沙漠学会 砂漠工学分科会、東京農業大学 砂漠緑化研究部会/砂漠に緑を育てる会

CPD 付与 森林分野 CPD, 建設コンサルタント協会 CPD 認定プログラム (3.5 ポイント)

3) 生物多様性緑化研究部会

生物多様性研究部会 倉本理事より、2000 年 4 月から毎月開催している zoom 連続講演会が、現在までで 65 回開催され、あと 6 回の講演を残すことが報告された。今期 8 月までで終了予定、延べ約 3,000 人が聴講したことも伝えられた。

4)生態・環境緑化研究部会

生態・環境緑化研究部会 中村理事より、以下の活動報告があった。

①阿蘇ワーキングチーム 阿蘇における活動および現地プロジェクト

- ・自然保護助成基金 助成成果報告書が J-stage に公開 (2025 年 5 月 30 日)
- ・引き続き、草原再生協議会での活動を継続。
- ・環境省 阿蘇くじゅう国立公園管理事務所および、熊本県阿蘇振興局との情報交換を継続。

②部会勉強会の実施

- ・内容 大阪・関西万博会場の地域性種苗利用事例の現地検討会
- ・日時 2025 年 6 月 30 日 (月) 10:30~12:30
- ・場所 大阪・関西万博 静けさの森および、小催事場
- ・目的と概要 大阪・関西万博会場の大規模緑地における地域性種苗を用いた生物多様性緑化について、その現状視察および、設計施工技術者との実現プロセス・工夫や課題、今後の維持管理と活用などを意見交換し、地域性種苗による生物多様性緑化の社会実装について見識を深める。あわせて、今後開催の 56 回大会のシンポジウム「緑化の未来を拓く！森林・草地生態系における植物群集形成の科学」の話題提供とする。
- ・講師 日建設計(株) 岩田氏, エスペックミック(株) 山口氏
- ・主催, 共催 日本緑化工学会 生態・環境緑化研究部会, エスペックミック(株), 日建設計(株)

(以上)

会員の異動

(令和7年2月 1日～令和7年5月31日)

《入会》	学生会員	16名
氏名	勤務先	
堤 経心	北見工業大学	
齊藤 翼	東京農業大学大学院	
横井竜馬	北見工業大学	
銭谷卓人	千葉大学大学院	
成川央庸	東京大学	
高橋奈々	北海道大学	
尾上 萌	千葉大学	
宮崎 瞳	北海道大学	
重野真修	北海道大学	
石毛茉希	東京農業大学	
中谷智喜	北海道大学	
藤原玄基	東京農業大学	
吉原知世	千葉大学	
名倉篤徳	千葉大学	
川東夏子	京都大学大学院	
吉原裕人	千葉大学	

《退会》	正会員	3名
榑野遼介,森原百合,池谷真希		
《退会》	学生会員	2名
村上 萌(北海道大学),若林日菜(千葉大学)		

賛 助 会 員

2025年8月31日現在

団 体 名	〒	所 在 地 URL	TEL FAX
会津法面 (株)	967-0600	福島県南会津郡南会津町山口字欠河原 1784	0241-72-2624
(有) アルファグリーン	231-0023	神奈川県横浜市中区山下町 99-1-207 http://www.a-green.org	045-650-5360 045-650-5365
(株) 大林組技術研究所	204-8558	東京都清瀬市下清戸 4-640 http://www.obayashi.co.jp/	042-495-1111 042-495-0901
(一社) 街路樹診断協会	108-0074	東京都港区高輪 3-4-1 高輪偕成ビル 8 階 http://www.gaishin.com	03-6447-7288 03-6450-2274
鹿島建設 (株) 技術研究所	182-0036	東京都調布市飛田給 2-19-1 http://www.kajima.co.jp/	042-485-1111 042-488-3394
(株) KANSO テクノス	541-0052	大阪府大阪市中央区安土町 1-3-5 http://www.kanso.co.jp/	06-6263-7320 06-6263-7321
共和コンクリート工業 (株)	061-1405	北海道恵庭市戸磯 385-36 http://www.kyowa-concrete.co.jp/	0123-34-3366 0123-34-3369
グリーンキャスター事業協同組合	930-0094	富山県富山市安住町 3-14 富山県建設センター1F	076-442-5300 076-442-5322
栗田工業 (株)	164-0001	東京都中野区中野 4-10-1 中野セントラルパークイースト http://www.kurita.co.jp/	03-6743-5000
(株) ケイエフ	590-0021	大阪府堺市堺区北三国ヶ丘町 8-7-7 http://www.norimen.com/	072-232-6060 072-232-6008
小岩金網 (株)	111-0035	東京都台東区西浅草 3-20-14 http://www.koiwa.co.jp/	03-5828-8828 03-5828-7693
(株) 構研エンジニアリング	060-0034	札幌市中央区北 4 条東 4 丁目 1 番地 1 創成クロス https://www.koken-e.co.jp/company/	011-522-7682 011-522-7692
(株) 高速道路総合技術研究所	520-3121	滋賀県湖南市西寺 1-1-1 緑化技術センター http://www.ri-nexco.co.jp	0748-77-2124 0748-77-4019
国土防災技術 (株)	105-0001	東京都港区虎ノ門 3-18-5 青葉ビル 4F http://www.jce.co.jp/	03-3432-3567 03-3432-3576
サンスイ・ナビコ (株)	103-0025	東京都中央区日本橋茅場町 2-7-1 アソルティ日本橋茅場町 2F http://www.snse.co.jp/	03-5623-3600 03-5623-5554
(株) 住環境研究所	101-0047	東京都千代田区内神田 1-14-10 PMO 内神田 9 階 https://www.jkk-info.jp/	03-6275-0450 03-6275-0453
上毛緑産工業 (株)	370-3607	群馬県北群馬郡吉岡町大字小倉 827-87 http://www.jouryoku.com/	0279-54-7723 0279-54-8603
(株) 新日本緑化	464-0850	愛知県名古屋千種区今池 2-1-18 http://www.sn-ryokka.co.jp/	052-732-2081 052-741-4175

賛 助 会 員

団 体 名	〒	所 在 地 URL	TEL FAX
(株) スペース・グリーン	580-0043	大阪府松原市阿保 5 丁目 7 番 25 号 https://spacegreen.co.jp/	072-331-1103 072-331-1180
(一社) 全国特定法面保護協会	105-0004	東京都港区新橋 5-7-12 丸石新橋ビル 3F http://www.norimen.or.jp/	03-3437-2588 03-3437-2566
大建工業 (株)	101-8950	東京都千代田区外神田 3-12-18 住友不動産秋葉原ビル	03-6271-7799 03-5296-4057
(株) 高特	377-0003	群馬県渋川市八木原 224-14 http://www.takatok.co.jp/	0279-22-2035 0279-23-3913
多機能フィルター (株)	744-0061	山口県下松市葉山 2-904-16 http://takino.co.jp	0833-46-4466 0833-46-4678
田中建設 (株)	034-0012	青森県十和田市東一番町 2-50 http://www.tanaka-net.co.jp	0176-23-3521 0176-25-7011
(株) タニガキ建工	640-0405	和歌山県紀の川市貴志川町岸宮 433 http://k-tanigaki.co.jp	0736-64-8989 0736-64-8889
東京パワーテクノロジー (株)	135-0061	東京都江東区豊洲 5-5-13 豊洲アーバンポイント http://www.tokyo-pt.co.jp/	03-6372-7125 03-6372-4162
東興ジオテック (株)	104-0061	東京都中央区銀座 7-12-7 高松建設ビル http://www.toko-geo.co.jp/	03-3456-8751 03-3456-8752
(株) 東平商会	411-0943	静岡県駿東郡長泉町下土狩 72-1 http://www.tohey.co.jp/	0559-86-8898 0559-87-0047
東邦レオ (株)	170-0004	東京都豊島区北大塚 1-15-5 http://www.toho-leo.co.jp	03-5907-5500 03-5907-5510
中日本ハイウェイ・エンジニア リング東京 (株)	160-0023	東京都新宿区西新宿 1-23-7 新宿ファーストウェスト 9F https://www.c-nexco-het.jp/	03-5339-1711 03-5339-1719
(株) 西村建設	861-4703	熊本県下益城郡砥用町大字畝野 2900	0964-48-0208 0964-48-0513
(株) ニチノー緑化	103-0001	東京都中央区日本橋小伝馬町 14-4 岡谷ビルディング 6F http://www.nichino-ryokka.co.jp	03-3808-2281 03-3808-2360
(株) 日さく	330-0854	埼玉県さいたま市大宮区桜木町四丁目 199-3 https://www.nissaku.co.jp/	048-644-3911 048-644-3958
日新産業 (株)	501-6002	岐阜県羽島郡岐南町三宅 3-224 http://www.nisshin-sangyo.com	058-247-7529 058-247-7359
日特建設 (株)	103-0004	東京都中央区東日本橋 3-10-6 平和東日本橋ビル 6F http://www.nittoc.co.jp/	03-5645-5050 03-5645-5051
日本乾溜工業 (株)	812-0054	福岡県福岡市東区馬出 1-11-11 http://www.kanryu.co.jp/	092-632-1003 092-632-1023

賛 助 会 員

団 体 名	〒	所 在 地 URL	TEL
			FAX
日本基礎技術（株）	151-0072	東京都渋谷区幡ヶ谷 1-1-12NKG 東京ビル http://www.jafec.co.jp/	03-5365-2500 03-5365-2521
日本植生（株）	708-8652	岡山県津山市高尾 573-1 http://www.nihon-shokusei.co.jp/	0868-28-0251 0868-28-4410
日本特殊緑化協会	062-0032	北海道札幌市豊平区西岡 2 条 12 丁目 2 番 15 号 http://www.jsra-web.com/	011-584-3016 011-584-3030
日本緑化工協会	125-0042	東京都葛飾区金町 5-35-5-206 http://www.ryokkakou.com/	03-5660-1664
（株）ネクスコ・エンジニアリング 東北	980-0013	宮城県仙台市青葉区花京院 2-1-65 花京院プラザ 13F http://www.e-nexco-engito.co.jp/	022-713-7291 022-721-1259
（株）ネクスコ東日本エンジニア リング	116-0014	東京都荒川区東日暮里 5-7-18 コスモパークビル 3F http://www.e-nexco-engi.co.jp	03-3805-7911 03-3805-7902
法面プロテクト（株）	520-0232	滋賀県大津市真野 6-14-11 http://www.norimen-protect.com/	077-571-3521 077-571-3522
（株）フジタ技術センター	243-0125	神奈川県厚木市小野 2025-1 https://www.fujita.co.jp/	046-250-7095 046-250-7139
富士見工業（株）	422-8026	静岡県静岡市駿河区富士見台 1 丁目 21 番 22 号	054-283-2933 054-283-2969
紅大貿易（株）	101-0048	東京都千代田区神田司町 2-8-3 第 25 中央ビル http://www.benidai.co.jp/	03-3256-0551 03-3254-7126
（一社）北海道造園緑化建設業協会	060-0051	北海道札幌市中央区南一条東 1 丁目 2 番地 1 太平洋興発ビル 2 階 http://www.hokuzoukyou.or.jp/	011-221-4451 011-232-5611
前田工織（株）	105-0011	東京都港区芝公園 2-4-1 芝パークビル A 館 12F http://www.maedakosen.jp/	03-6402-3944 03-6402-3945
（株）マキノグリーン	742-0031	山口県柳井市南町 7-2-6 http://www.makino-green.com/	0820-23-4082
山形開発工業（株）	596-0805	大阪府岸和田市田治米町 75 http://www.ymgt.co.jp	072-441-3602 072-441-3838
雪印種苗（株）	261-0002	千葉県千葉市美浜区新港 7-1 http://www.snowseed.co.jp/	043-241-7732 043-238-1383
ライト工業（株）	102-8236	東京都千代田区九段北 4-2-35 http://www.raito.co.jp/	03-3265-2551 03-3265-0879
（株）緑生研究所	182-0026	東京都調布市小島町 2-40-10 桐生ビル 2F http://www.ryokusei-ri.co.jp	0424-99-7211 0424-87-4334
ロンタイ（株）	570-0011	大阪府守口市金田町 3-1-11 http://www.rontai.co.jp	06-6902-9401 06-6905-9070

編集後記

3号続けての登場となり申し訳ありません。今期の途中からレターの発行が始まったため、編集体制が整っておらず、ワンオペ状態での制作になっていますので、どうかお許しください。原稿の募集だけでなく、次期の編集に協力してくださる方も大募集しています。

学会の京都大会が迫ってきましたが、大会は常にアウェーの気持ちで参加しています。私が小さな大学の研究室の出身なので、大会参加者に同窓生が一人もい

ないときもあります。そのため、大きな大学出身の方々が親しげに会話している姿に羨望のまなざしを向けていました。そんな中、2023年の新潟大会の際に、平林さんが同じ大学出身であることを知りました。学部もキャンパスも違いますが、同窓であることに違いはありません。これは距離を縮めねばと思い、会員紹介の執筆をお願いしました。ご快諾頂いたときは、これが同窓パワーかと、うれしくなりました。

(岡 浩平, k.oka.gw@cc.it-hiroshima.ac.jp)

複写される方へ

日本緑化工学会では、複写複製、転載複製及びAI利用に係る著作権を一般社団法人学術著作権協会に委託しています。当該利用をご希望の方は、(社)学術著作権協会 (<https://www.jaacc.org/>) が提供している許諾システムを通じてご申請下さい。

日本緑化工学会 コミュニティレター Community Letter of the Japanese Society of Revegetation Technology

第3号 (No.3)

令和7年8月31日 発行 (April 2025)

編集兼発行人 岡 浩 平

発 行 所 日 本 緑 化 工 学 会

〒113-0001 東京都文京区白山 1-13-7

Tel. 03-3818-8281 Fax. 03-3818-8282

事務局 : E-mail: office@jsrt.jp
